

—新生「上田市」発足3周年記念事業—

信濃の東山道と万葉歌



信州大学附属図書館



<10>0020836508

市立信濃国分寺資料館

092.193

sh 59

—新生「上田市」発足3周年記念事業—

信濃の東山道と万葉歌

上田市立信濃国分寺資料館

はじめに

わが国の古代における律令制下の交通・通信の制度は、駅伝制と呼ばれています。この制度に基づいて大規模な計画道路が、都から地方へ放射状に建設されました。これらの道路は七道あり、東山道はその一つの重要な官道でした。この制度は中国唐の制度を模しており、7世紀後半には整備が進み、大宝律令（701年）によって駅伝制は成立したとみられています。この東山道は近江・美濃・飛驒・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の国々の国府を最短距離で結ぶ官道であるとともに、行政区画でもあります。

信濃国には「延喜式」によると、東山道の本道に阿知・育良・賢錐・宮田・深沢・覚志・錦織・浦野・日理・清水・長倉の駅が置かれ、さらに越後国府へ通じる支道に麻績・日理・多古・沼辺の駅が置かれました。こうした文献や地名・地形などからそのルートが推定されています。また近年では発掘調査により、長野県内の東山道推定期沿いの古代遺跡から、東山道に関係すると推定される資料の出土もみられます。

今回の特別展では、県内の東山道推定期近くの遺跡から出土した石製模造品、陶磁器、硯、瓦、金属器、木製品などの貴重な資料を展示し、古代東山道の歴史や文化の一端を紹介します。特に石製模造品が多数発見された阿智村の神坂峠遺跡、伊那郡衙跡がほぼ確定した飯田市の恒川遺跡群、東山道の側溝とみられる遺構が出土した箕輪町の大通上遺跡、付近に東山道の通過が推定される塩尻市吉田川西遺跡、上田市の高田遺跡、信濃国分寺跡、佐久郡衙跡が近くに推定される佐久市の聖原遺跡、長倉駅が付近に推定される御代田町の野火付遺跡などの出土資料を展示いたしました。

また信濃における東山道ゆかりの万葉歌や建立されている万葉歌碑についてもあわせて紹介します。歌碑は阿智村の神坂神社、松本市の薄川河畔や保福寺峠、上田市の浦野、軽井沢町の碓氷峠などに建立されており、写真パネルなどで展示いたしました。

最後に今回の特別展を開催するにあたり、貴重な資料をご出展いただきました皆様方、またご指導、ご協力を賜りました関係各位、諸機関に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成21年9月

上田市立信濃国分寺資料館

目 次

「神坂峠と石製模造品と古東山道」	1	8 上田市西部の東山道推定路と高田遺跡・道路状遺構	62
「考古資料から見た佐久地方の東山道推定路」	12	9 上田市駕籠田遺跡と道路状遺構	65
「下野国における推定東山道」	17	10 上田市唐臼遺跡と日理駅推定地	66
I 東山道と律令国家	37	11 上田市信濃国分寺跡と国分遺跡群出土道路状遺構	68
1 五畿七道と東山道	37	12 小諸市清水駅推定地	71
2 駅制・延喜式と東山道	39	13 佐久地方の東山道推定路	72
II 信濃の東山道	41	14 佐久市聖原遺跡・前田遺跡	74
1 県内の東山道推定ルート	41	15 御代田町野火付遺跡の埋葬馬	76
2 古東山道の推定ルートと石製模造品	43	IV 信濃ゆかりの万葉歌と万葉歌碑	77
3 令制東山道と信濃国府	45	1 信濃ゆかりの万葉歌・歌碑	77
4 東山道を通行した人々	49	2 阿智村神坂神社万葉歌碑	79
III 県内の東山道関係遺跡	50	3 塩尻市宗賀の万葉歌碑	81
1 阿智村神坂峠遺跡	50	4 松本市薄川河畔と保福寺峠の万葉歌碑	82
2 飯田市恒川遺跡群	52	5 上田市浦野と菅平高原の万葉歌碑	84
3 笠輪町大道上遺跡・中道遺跡	54	6 軽井沢町旧碓氷峠の万葉歌碑	86
4 塩尻市吉田川西遺跡	56	特別展「信濃の東山道と万葉歌」関係遺跡位置図	87
5 松本市下神遺跡	57	展示資料目録	88
6 松本市県町遺跡・大村遺跡・大輔原遺跡	58	引用・参考文献	92
7 青木村浦野駅推定地	61		

例 言

1. 本書は平成 21 年 9 月 12 日(土)から平成 21 年 11 月 8 日(日)までを会期とする特別展「信濃の東山道と万葉歌」の展示概説として作成した。
2. 本書を作成するにあたり、多くの書籍を参考・引用させていただいた。厚く御礼申し上げる。なお、巻末の引用・参考文献の番号と本文中の文献番号は同一である。
3. 紙面の都合で展示資料のうち図録に掲載できなかった資料がある。
4. 掲載写真は所蔵者から提供を受けたり、調査報告書等から許可を得て転載させていただいた。また当館職員が資料調査に際して、許可を得て撮影した写真が含まれている。
5. 本書の執筆は、「神坂峠と石製模造品と古東山道」が市澤英利氏(阿智第三小学校長)、「考古資料から見た佐久地方の東山道推定路」が堤隆氏(浅間縄文ミュージアム主任学芸員)、「下野国における推定東山道」が中山晋氏(とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター部長補佐)、解説文の執筆は第Ⅲ章第1節が川上元氏(大妻女子大学非常勤講師)、その他の解説文の執筆・編集は倉沢正幸(当館館長)が担当した。なお、万葉歌・万葉歌碑については、藤森芳房氏(元真田中学校長)から写真・資料のご提供や種々ご教示をいただいた。

神坂峠と石製模造品と古東山道

阿智村立阿智第三小学校長 市澤 英利

はじめに

701年、大宝律令が完成し、律令による国家体制へと本格的に移行していった。国内は畿内と七道(東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道)に行政区区分された。(図1) 各道にはいくつかの国があり、国にはいくつかの郡があり、郡にもいくつかの里(のち郷と改称)があり、国司・郡司・里長といった役人が配置された。信濃国は、東山道に行政区区分された。

律令による国家体制は中央集権国家を目指したもので、これを維持していくためには、中央と道内の諸国とが緊密に結びついている必要があった。中央政権は畿内から道内諸国に通じ、國家が維持管理する官道を設置した。官道は駅路といい、約16キロメートルごとに駅家が設けられた。駅家には駅馬、駅子が在り、情報がより速やかに伝達されるしくみが整えられた。そして、官道は、各道の名称で呼ばれ、信濃国内を通過する官道の駅路は「東山道」であった。

「東山道」の起点は、近江国勢多駅で、不破関から美濃国に入り、美濃国を東に進んで、神坂峠を越えて信濃国に入った。伊那谷を北上して松本平に入り、保福寺峠を超えて上田に出、千曲川を遡って碓氷峠を越えて上野国へ出た。上野国を東に進んで下野国へ、ここから北に向かって陸奥国・出羽国へと通じていた。全長約1000キロメートルの東山道は、内陸部を通過する「山の路」で、中路として重要視された。このように国家が設置、維持、管理した東山道は、「令制東山道」と呼ばれている。

一方、律令による国家体制ができあがる以前の古墳時代においても、畿内と信濃や東国を結ぶ道は存在していた。この道を「古東山道」と呼んでいる。「令制東山道」の原形になる道が、古墳時代に存在していたのである。そして、「古東山道」の道筋を研究する上で注目されて来た考古資料が「石製模造品」である。本稿では、石製模造品が大量に発見されている神坂峠遺跡を中心とし、神坂峠の東西地域での「古東山道」事情について考えてみたい。



図1 律令制下の七道

1 天竜川水系と木曽川水系を結ぶ神坂峠

信濃国と美濃国の中間は、中央アルプスや恵那山地が障壁になっている。そのため、大平峠、清内路峠、神坂峠を越える峠道で結ばれ、現在は、清内路峠を越える国道 256 号線がもっとも整備されて、主要路となっている。しかし、古代、中世においては、神坂峠を越える峠道が主要路であった。

神坂峠は、南北に連なる恵那山(2191m)と富士見台(1739m)に挟まれた鞍部で、標高は 1576m である。信濃国側は園原川の、美濃国側は冷川の源流になっていて、峠付近はやせ尾根状になっている。園原川は天竜川水系へ、冷川は木曽川水系へ流れ下っていて、峠は分水嶺でもある。



写1 峠付近から木曽川水系を見る



写2 峠付近から天竜川水系を見る

峠一帯からは、東西方向の風景が眺められる。木曽川水系の風景は、丘陵的である。笠置山が印象的であるが、荒々しい高山はない。(写1)一方、天竜川水系の風景は、重複する山並みの彼方に天竜川沿岸の低地、その向こうに 3000 メートル級の南アルプスが高峰を眺められる。(写2)このような眺めの違いは、峠の東西域での自然環境が大きく異なることを実感させてくれる。こうした眺めに接した古代に旅した人々にしてみれば、東国と西国の境界を実感したのではないかと思う。神坂峠は、列島中央部にあって東国と西国との境をなす峠と考えられるのである。

防人として西国へ赴いた埴科郡の神人部子忍男の歌からは、東国を後にして西国へと向かう胸中が忍ばれてくる。

知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 悅佐麻都里 伊波負伊能知波 意毛知知我多米（『万葉集』卷 20）

2 神坂峠遺跡と石製模造品

調査の経緯

神坂峠が、遺跡であることを実証したのは鳥居龍藏であった。大正 9 年のことである。以後、神坂峠越えの道は、伊那谷への文化移入ルートの一つととらえられてきた。

昭和 26 年に、『下伊那誌』編纂の編纂顧問に招聘された國學院大學の大場磐雄が、峠の東麓の遺跡及び神坂峠遺跡を踏査した。



写3 万葉歌碑

大場は峠の東麓の遺跡に遭された石製模造品は、手向けされたり、製作されたりしたものととらえ、古代の道筋を示していると考察した。そして、神坂峠は荒ぶる峠神に手向けを行った祭祀の場で、神坂峠遺跡は、峠を旅する人々が峠神に祈りを捧げた祭祀遺跡であると性格付けた。

昭和42年、開発ブームの波が各地に押し寄せていた。神坂峠遺跡では、林道開発の計画のあることから試掘を伴う分布調査が実施された。石製模造品はもとより、土器・須恵器・灰釉陶器・縁釉陶器・鉄片などが数多く得られ、峠における祭祀遺跡として考古資料が良好に収蔵されている遺跡であることが確認された。

翌43年、古代の祭祀の具体的な姿を求めて、大場磐雄を調査団長とする調査団が編成され、本格的な調査が行われた。そして、石製模造品などの遺物の出土地点が明確に記録された。(図2)

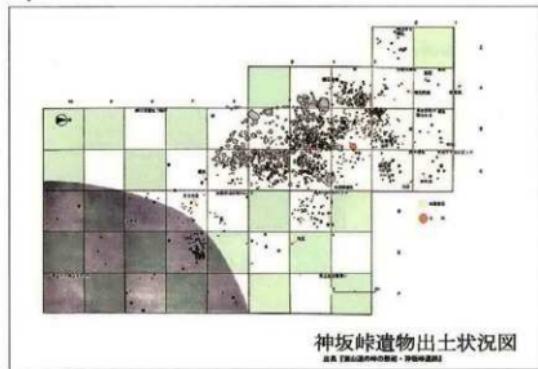


図2 神坂峠遺跡の遺物分布

縄文時代から中世までの遺物が出土

発掘調査は、峠の北側にある三方を尾根に囲まれた平坦地で行われた。(図3) 一帯の表層土は薄く、各時代の遺物が混在して出土する状況であった。

出土した遺物は、縄文時代の石器から中世の陶磁器まであり、峠が長い期間交通路、交流路として利用されたことが確認された。遺構としては積石遺構が検出され、その周辺から石製模造品をはじめとする各時代の遺物が数多く出土し、祭祀の中心的な場所と考えられた。しかし、峠で行われた祭祀の様子を具体的に復元できる考古資料には恵まれなかった。一方、積石遺構はその重要性が認識され、完掘はされず、再調査のため保存された。

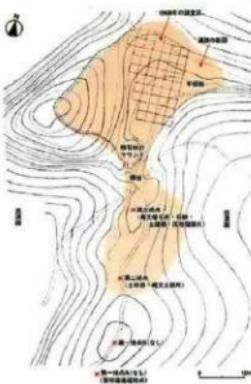


図3 神坂峠遺跡の範囲図

神坂峠遺跡の“石製模造品”

43年の調査で1400点余の出土があり、これ以前の調査や表面採集でも数多く発見されており、峠に遺された石製模造品は大量であったといえる。

出土した石製模造品は、鏡形・刀子形・斧形・鎌形といった模造品がわずかにあったが、大半は劍形・円板・白玉である。(写4) 報告書では、それぞれが型式分類され、未製品とも照らし合わせてその製作工程も考察された。

近年になって、出土した劍形模造品の一部が蛍光X線分析され、石材は緑泥片岩や結晶片岩と鑑定された。これらの岩石は、南アルプス山地を形成する三波川帯に産する岩石で、天竜川の支流によって天竜川に運ばれてきたものが使用されたと思われた。そこで、天竜川で採取した緑泥片岩や結晶片岩などで石製模造品を製作してみたところ、やや硬い岩石であるが製作できた。しかし、復元



写4 神坂峠遺跡出土の石製模造品

模造品を同様の方法で分析していただいたところ、出土した石製模造品の石材とは異なる結果が示され、その製作環境については今後の課題である。今後は、群馬県など東国一帯で発見されている製作遺跡での製品と比較し、模造品の製作環境を明らかにしていく必要がある。

3 神坂峠東西麓域や天竜川沿岸域出土の石製模造品

神坂峠には大量に石製模造品が遺されたが、その東西麓域や天竜川沿岸域ではどんな出土状況にあるのか、調べてみた。その結果、刀子形・鏡形・劍形・円板・白玉は、滑石や緑泥片岩などで製作された模造品であるが、勾玉・管玉は、滑石製などの他、碧玉製などの装飾品に関わるものも含んでいた。また、琰玉、土玉、丸玉などが出土している。以下、神坂峠の西麓の中津川市、東麓の阿智村、天竜川沿岸域について出土状況を見てみる。

神坂峠西麓域の様子

西麓域については、わずかな文献の記載からではあるが、5遺跡での出土を確認した。しかし、山畠遺跡以外は出土の記録のみで、種類や数については不明であった。

山畠遺跡は、昭和43年に発掘調査が行われた。(写5) 巨石の周りから石製模造品や土器類が出土し、焼土や祭壇状の石組遺構も発見された。本遺跡は、東に神坂峠を真正面に眺める立地環境にあり、峠を意識した祭祀の場であると思われる。

神坂峠東麓域の様子

神坂峠の東麓域は、阿智村にあたり、23遺跡から石製模造品の出土が報告されている。これらは、表面採集された場合や地主が丹念に採集して保管してきた場合などがあり、村内に遭された石製模造品が多数であったことが窺える。中でも、中関遺跡、中原遺跡、川端・赤坂遺跡、大垣外遺跡は、出土数の多いことで注目でき、杉の木平遺跡は立地環境から注目できる。



写5 山畑遺跡一帯の巨石

中関遺跡は、集落遺跡である中原遺跡の南に位置し、網掛山を真正面にみる立地環境にある。台地下の湧水が形成する低湿地から、剣形と円板が円形に配したような状態で発見され、その周りからは白玉と土器類が小破片で出土している。網掛山の背後には神坂峠があり、峠を意識した祭祀の場ないし中原集落の住人の水辺の祭祀の場とも考えられる。

川端・赤坂遺跡は隣接する遺跡で、地主によって採集、保管されてきた。遺跡の北西側には湧水による湿地が形成されている。採集資料であるため、遺跡の状況は不明である。遺跡は、地形変換点に立地しており、峠への道筋にある祭祀の場のひとつと考えられる。

大垣外遺跡は、網掛峠への発着点に位置する遺跡で、かつて地主が植樹したときに160点余り模造品が出土したことから注目されてきた。近年、は場整備事業にともなって発掘調査された。浅い溝状の道路址やその周辺から礫や高坏などの埋設土器が20例ほど発見され、一帯から剣形・円板・白玉を主とする石製模造品が200点余出土した。埋設土器は祭器ととらえられており、これに石製模造品をともなう祭祀の場と考えられる。



写6 川端遺跡・大垣外遺跡遠望

杉の木平遺跡は神坂峠への発着点に位置している。2号テラスからは、巨礫のかたわらに置くような状態で白玉と土師器の壊が発見された。また、地山の礫を取り除いたと思われる一帯から、土器と石製模造品が出土しており、峠への道筋で行われた祭祀址と考えられる。

このように、神坂峠東麓一帯からは祭祀址と考えられる遺構からの出土が顕著であるといえる。

天竜川沿岸域の様子

天竜川右岸域(通称竜西)では、飯田市川路地区、竜丘地区、松尾地区、鼎地区、伊賀良地区、上郷地区、上飯田地区、座光寺地区から出土している。左岸域(通称竜東)では、川路地区の対岸

の龍江地区、喬木村、豊丘村で出土している。また、山間部の上久堅からも出土している。

天竜川沿岸域での石製模造品の出土場所の大半は住居址である。しかも、出土している石製模造品は白玉がほとんどである。他には、周溝墓、土墳墓、溝址、古墳等から出土があるが、祭祀址からの出土は、彌地区の天伯B遺跡のみである。(写7)

天伯B遺跡の祭祀址は、壺・甕・高坏など複数個体の土器類が重ねられ、埋設された状態で検出された。これらの土器類は、祭器とされ住居址出土のものとは調整痕や形態にやや違いがみられるとの観察がなされている。また、一帯から白玉が170点余出土しているが、円板と勾玉の模造品が各1点出土したにすぎない。一帯からは、祭器のほかにピット群が検出され、土器類も数多く出土している。祭祀址は、集落の中の空閑地にあり、集落全体の屋外祭祀の場と考えられる。



写7 天伯B遺跡の祭祀址

4 構成される石製模造品の違い

神坂崎遺跡から出土している石製模造品は、種類も数も豊富であるが、主体をなすのは、白玉・剣形・円板である。この構成をみた結果が、表1である。白玉が全体の60パーセント強を占め、続いて剣形が20パーセント強、円板が10パーセント弱という構成比になっている。(表1)

同様の傾向は、峠の西麓域の山畠遺跡や東麓域の阿智村内の遺跡群出土の模造品の構成状況に認められる。しかも、阿智村の遺跡群の場合は、剣形や円板が占める割合は峠の場合の2倍近くになっており、剣形や円板の出土数の多さが際立つ。ただ、これには、発掘調査ではなく地主などが収集した模造品を含んでいることが関係しているといえる。それは、白玉は小さく表面採集では採集されにくいということがあるからである。とはいえ、阿智村内にはたくさん剣形や円板が遺されたといえる。

そして、この傾向は、信濃国と上野国との境にあって、やはり峠の祭祀遺跡である入山崎遺跡にも認められるのである。

石製模造品等出土数一覧

地区	西澤	刀子形	鏡形	円板	口玉	勾玉	白玉	ガラス玉	その他	計
中津川市西澤	5	1	28	29	79	2	1	1	1	142
神坂崎遺跡	15	1	347	148	1030	25	20	25	1	1693
阿智村西澤	23	0	1	311	198	359	13	26	1	883
川路	4				2	36	4	8	1	49
牧	2		1			10	1	2		15
鹿古	1					13	1			15
柏原	2				2	18	2	8	18	48
伊	3				3	381	4	2	4	482
伊賀	4		1							5
上野田	1					1				1
上山	4		1	2	46	1	4	14	79	
駒形寺	0		11	15	323	14	39	45	76	1199
上久堅	2				2					2
佐木村	1			2	3	14		1	1	10
鹿古村	2				17	1				18
川路・最戸村計	32		17	27	1400	27	45	50	37	1793

石製模造品等出土数の構成比

地区	刀子形	鏡形	円板	口玉	勾玉	白玉	ガラス玉	その他	計
中津川市山畠の山畠	4	0.7	29.6	14	16.2	1.4	6.7	0.7	160
神坂崎遺跡	1.0	0.06	71.3	8	65.7	1.7	1.7	0.3	160
阿智村	6.2	0.1	38.6	12	36.2	1.6	2.3	0.1	160
川路・鹿古村	0	0	1	1	1	1.0	2.6	0.8	5.6
参考・入山崎	0.2	0	34.7	11	46.7	1.1	4.1	0.5	160
参考・高尾遺跡	0	0	0.7	1.9	91.7	4.4	6.7	3.3	112

表1 石製模造品等の出土数一覧と構成比

一方、天竜川沿岸域の遺跡群から出土している石製模造品の大半が臼玉であって、神坂峠や東麓域の阿智村内で数多く出土している剣形や円板はわずかで、全体の1パーセント程度を占めているに過ぎない。天伯B遺跡の祭祀址の場合も、数多くの土器類と臼玉178個、円板と勾玉が各1個発見されている状況である。天竜川沿岸域の遺跡群では、出土する石製模造品は臼玉が主で、住居址から出土するという場合が一般的である。参考に、松本市高宮遺跡の祭祀遺構から出土している石製模造品の構成をみてみると、剣形や円板は1パーセントに満たない状況にあり、同様の傾向を示しているといえる。

以上のように、神坂峠遺跡・峠の東西麓域の遺跡群・天竜川沿岸域の遺跡群から出土している剣形・円板・臼玉の構成状況には、二つの場合が認められる。

ひとつは、神坂峠遺跡及び東西麓域の遺跡群で、剣形・円板の出土数が多く、そのため臼玉の占める割合が低くなっている場合である。この傾向は、峠越えの祭祀遺跡である入山峠遺跡でも認めることができ、峠越えに際して行われた祭祀行為である石製模造品の用い方の一端を示していると考えたい。

もう一つは、天竜川沿岸域の遺跡群で見られるように、剣形や円板の出土数は非常に少なく、主体となるのは臼玉である場合である。この傾向は、高宮遺跡の祭祀遺構でも窺うことができる。高宮遺跡の祭祀の対象を報告者は、奈良井川の洪水を起こす神、または稻作の農耕神の可能性を指摘している。天竜川沿岸域では、どのような神に対して祭祀が行われていたか明確にできていないが、屋外や屋内で祭祀が行われたことは確かである。

こうした点から、剣形・円板は、峠越えを意識した祭祀に関わる側面が大きいと思われる所以ある。

5 石製模造品と古東山道の道筋

前述してきているように、峠の東西麓域出土の石製模造品と天竜川沿岸域出土の石製模造品は、剣形・円板・臼玉が大半であるが、その構成状況が異なっている。そして、剣形や円板は峠越えの祭祀への関わりが大きいと考えられた。古東山道の道筋と関連させて考えてみたい。



図4 峠の東西麓域の遺跡の位置図

峠の東西麓域の道筋（図4）

峠の一带は、山地で小河川が複雑に入り組んでいる。これに断層が何本もあって、崩壊しやすい環境下にある。その範囲は、西は中津川市落合から東は阿智村の水晶山・西麓間である。

峠の東西麓域は、剣形・円板の出土数が多く、峠越えを意識した祭祀行為がなされたと考えられ、石製模造品出土遺跡を結んでいけば、古東山道の道筋をたどれるといえる。

峠の西麓では、峠の直下及び湯舟沢川、冷川の沿岸に遺跡は立地する。殿畠遺跡と強清水遺跡間での石製模造品の出土は知られていないが、中間付近の櫻平遺跡からは、石製模造品が盛行した時期の須恵器が出土しており、從来から言われてきているように、湯舟沢川から冷川もしくは霧ヶ原台地を通過する道筋と考えられる。

東麓は西麓に比べて、小河川が複雑に入り組んでいる。峠からは、園原川沿いに下ることが可能であるし、尾根道を下ることもできる。両者は園原の里の最も奥にある神坂神社で合流する。神坂神社の東に位置する杉の木平遺跡やその東側に立地する遺跡から石製模造品は採集されており、古東山道の道筋と推測できる。

園原の里からは、阿智川沿いに下る場合と網掛峠へ向かう場合を考えられるが、網掛峠の東麓に位置する大垣外遺跡とその周辺の遺跡から石製模造品は出土しており、網掛け峠越えが古東山道の道筋といえる。さらに下って川端・赤坂遺跡の周辺の遺跡からも石製模造品が出土しており、ここから阿智川へ下っていったと推測できる。阿智川をどこで渡ったかは不明であるが、水晶山・大峯山の山並みの西に位置する中原遺跡や中関遺跡へと通じていたと考えられる。

中原遺跡は、西方に網掛け山・網掛け峠、その背後に神坂峠が隠れている様子を眺める立地環境にあり、自然と峠越えを意識する気持ちになる。ここから峠へかけての遺跡からは、剣形や円板の出土数がぐっと多くなることも見逃せない。水晶山・大峯山の山並みを越えて中原遺跡付近に至ると、峠越えを意識した祭祀が始まるのではないかと考えられるのである。

天竜川沿岸域の道筋

神坂峠の東西麓域及び天竜川沿岸域の石製模造品等出土遺跡

遺跡名	刀子形 片手 鉤頭	圓盤	円板	口玉	如意	扇玉	ガラス玉	その他	計数	主な出土場所
A 高台遺跡	1	○	○						1	平野
B 石塚	1	36	21	75	2	1	1	1	143	開拓地
C 伊賀				○						不詳
D 横瀬水		○								不詳
E 佐波山		○								不詳
F 佐波山下				○						不詳
1 神崎44	15	1	347	148	1838	26	20	35	5	1521 番地跡
2 佐波山-平子		13	10	2						24 番地跡
3 大坂井	1	1	216	79	18	4	19	1	401 番地跡	
4 大坂井-赤坂	1	28	13	15	3					55 赤坂
5 中原		28	17	48					2	中原跡
6 大峯	24	13	182	2	4				176 番地跡-大峯	
7 江戸下		1	7	1						9 江戸下
8 佐波		1	27	1	1	1	2	33	*	
9 望ヶ丘			3	1					3	*
10 霧ヶ原山内				3					3	*
11 横瀬		1	10	1	1			1	14	*
12 横瀬の原		1	13	1					15	*
13 湯舟		1	18			1	12	24	強清水-湯舟	
14 大坂井			4	1					5	強清水-土城跡
15 宮窓		1	370	3	2	4	6	364	番地跡-御坂跡	
16 津波		1							1	津波跡
17 赤坂		1	21						22	*
伊賀 18 上の金谷		1							1	伊賀片
19 小坂内		1							1	小坂内
上 番地 20 大山			1						1	大山跡
上 番地 21 強清水	1	2	46	1	2				49	強清水
番地跡 22 横瀬御跡	11	18	927	14	28	36	81	1067 番地跡		
番地跡 23 伊賀原跡	2	1	14		1			1	16	*
番地跡 24 神坂			17		1				18	*
番地跡 25 番										*
										正式報告がなく跡目不明

表2 神坂峠の東西麓域及び天竜川沿岸域での主な石製模造品出土遺跡一覧

峠の東西域の古東山道の道筋は、剣形や円板の出土遺跡と自然地形が提供してくれる道筋で、大方の見解が一致しているが、中原遺跡から以東や以北の道筋については決定的な証拠は見つかっていないのが現状である。

天竜川沿岸域で石製模造品が出土している主な遺跡の広がりは、図5に示したようである。いずれの遺跡も白玉を主に石製模造品が出土した遺跡で、その出土場所は、集落址や墓址からである。南からみると飯田市川路地区、竜丘地区、松尾地区、上郷地区、

座光寺地区で出土している。ちょうど、現国道が通過している周辺部で確認されているとともに、後の伊那郡衙が置かれた恒川遺跡のある座光寺地区は、伊那郡衙に関わる範囲確認調査が行われていることも関係するが、一番多くの石製模造品の出土が確認されている。そして、この5地区には前方後円墳が築造されるとともに古墳が密集している。こうした点から決定的な根拠とはいえないが、古東山道は川路・竜丘・松尾・上郷・座光寺地区を通過する道筋が妥当と考える。



写8 中原遺跡からの西方の眺め



図5 天竜川沿岸域の石製模造品出土遺跡位置図

この5地区から外れる鼎地区、伊賀良地区、上飯田地区、龍江地区、喬木村、豊丘村については、古東山道の周辺部に展開した集落址と考えられる。幹線道路の周辺部といえども、飯田松川沿いの段丘上に展開した天伯B遺跡をはじめとする鼎地区的遺跡や龍江地区的細新遺跡、喬木村の伊久間原遺跡では、大規模な集落が形成され、開発が進んだことがわかる。

一方、阿智村中原遺跡と川路地区を結ぶ道筋についてみてみたい。中原遺跡の東の水晶山・大峯山を越えると三穂地区に出る。三穂地区は周囲を山に囲まれる盆地で、44基の古墳が築造さ

れている。正式な発掘調査は行われていないが、甲冑の出土が特徴的とされている。三穂地区から東の丘陵を越えると川路地区に出る。三穂地区での石製模造品の出土記録はないが、古墳の存在から考えて古東山道の道筋と考えられよう。

以上のように、神坂峠の東西麓域の古東山道の道筋は、石製模造品の出土遺跡と地形環境を勘案して想定することではほとんど間違いないといえよう。阿智村東端から天竜川沿岸域への道筋については、いくつかの道筋が想定できるが、白玉が主になるものの石製模造品を出土している遺跡と、古墳の立地から想定する三穂地区⇒川路地区⇒竜丘地区⇒松尾地区⇒上郷地区⇒座光寺地区を通過する道筋が、幹線道路として妥当といえよう。ただし、各地区のどこを通過したかについては現在明らかにできることは、皆無である。

おわりに

石製模造品出土の事実から、古東山道の道筋を探ってみた。結果は、從来考えられてきた道筋を追認するものであった。しかし、一口に石製模造品出土と括ってしまった結果、峠の東西麓域での剣形や円板の存在が顕著である事実や天竜川沿岸域での出土は白玉が主である事実が、明確に認識されずに考えられてきたような気がする。水晶山・大峯山を越えて網掛山や網掛峠を目の前にしたときから、剣形や円板の出番が多くなる。それは、峠越えを意識した人々の心の現われと考えたい。ここから峠へは、かつて大場磐雄が名づけた「神の道」といえよう。そして、峠の東麓域は石製模造品が数多く捧げられた「神まつりの里」ともいえよう。

最後に、「古東山道」の道筋と「令制東山道」の道筋について述べておわりとしたい。

冒頭に述べたように、令制東山道は国家が維持管理した道で、駅家が設けられた。信濃国に入つて最初の駅家は阿知駅である。阿知駅のあった場所は確認されていないが、駅家が必要とする建物や経済的な背景を考えたときに、これまでに考えられている現駒場一帯であることは確実といえよう。近年、駒場地区の安布知神社に所蔵されていた鏡が、奈良時代の唐式鏡である事実は阿知駅の存在を補強する事実と受け止められる。そして、遺跡の状況や地形環境から考えて、峠から阿知駅までの令制東山道の道筋は、古東山道の道筋と同じであったと考えられる。

一方、阿知駅から以北については、中央アルプスの山麓を通過する道筋、前述した古東山道の道筋、前二者の中間の段丘地帯を通過する道筋などが考えられているが、確定できる証拠は見つかっていない。今後、育良駅の場所、伊那郡衙の通過の有無、天竜川の支流の渡渉場所などいくつかの観点からの考察、考古資料の積み重ねでこそしづつ明らかにできていくと考えている。

参考文献

- 1925 烏居龍藏『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣
1967 大場磐雄『まつり』学生社

- 1969 阿智村教育委員会『神坂峠』
- 1972 岐阜県『岐阜県史 通史編 原始』
- 1983 軽井沢町教育委員会『入山峠』
- 1984 阿智村『阿智村誌 上巻』
- 1996 桜井秀雄「石製模造品を用いる祭祀儀礼の復元私案」『長野県考古学会誌』79号
- 2002 桜井秀雄「峠祭祀と石製模造品」「信濃」第54巻第8号
- 2005 長野県文化財保護協会『信濃の東山道』
- 2005 松本建速『長野県下伊那郡阿智村神坂峠遺跡出土石製模造品の化学成分分析に関する報告書』
- 2007 飯田市教育委員会『飯田における古墳の出現と展開』
- 2008 市澤英利『東山道の峠の祭祀』新泉社
- 2008 松本建速「理化学分析から見た神坂峠遺跡出土石製模造品の石材」阿智村東山道・園原ビジターセンター『神坂峠の石製模造品とその時代展』での講演要旨

考古資料から見た佐久地方の東山道推定路

浅間繩文ミュージアム主任芸術員 堀 隆

1 はじめに

上州では、浅間B軽石(1108年)に埋もれて東山道本体の発見がいくつかなされている。しかし、隣接する信州佐久地方では、これまで東山道そのものの発見例はない。

ここでは、古代佐久を通過した東山道について、考古資料からその存在を推定してみたい。

2 官道「東山道」のルート

「信濃なる浅間の嶺に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ」

在原業平の『伊勢物語』の歌では、東山道沿いに聳える活火山浅間山の噴煙を見事に織り混ぜているのだが、残念ながら業平自身がこの地を旅して作った歌ではないようである。

東山道は、信濃国分寺を過ぎると小諸へと入り、現在の御代田町域から軽井沢町と通過し、碓氷峠を越えて上野国坂本駅へと向かった。そのルートは、噴煙たなびく浅間山南麓をたどったに違いないが、細かな地点はいまだ不明のままである。また、佐久に置かれたという二つの駅家、「清水駅」と「長倉駅」の所在地も確定されていない。

このように書くと小諸の方々は、現在の国道十八号線と一四一号線の分岐点である小諸市諸が、「清水駅跡」だとご教示くださるに違いない。事実この場所には、「清水駅跡」という石碑が立っており、小諸市の史跡ともなっている。この近くには「星見の井戸」とよばれる井戸があり、付近の豊富な湧水(清水)や地割りなどから、この場所に清水駅の所在が推定されている。しかし、ここでは駅そのものが見つかったわけではないので、この場所は「清水駅跡」ではなく、あくまで「清水駅推定地」とすることになり、慎重な検討を要している。

おそらく小諸にあったであろう清水駅を過ぎた東山道が、御代田・軽井沢へとどのようなルートをたどったかは、諸説があり未解決のままである。東山道の御代田ルートは、場所によっては二〇を超える深い谷を形成する火山山麓特有の田切り地形をどのように通過するかという問題もある。しかしいずれにせよ次の三ルートのどれかを東山道がたどったことは間違いない(図1)。

- ① 小田井ルート 小諸市乙女一同御影・佐久市西屋敷を経て御代田町小田井・上宿とぬけ、その後の中山道沿いに軽井沢の追分へと向かったとするルート。この説によると長倉駅は今的小田井あたりにあったと考えられている。
- ② 馬瀬ロルート 小諸市加増から八溝・乗瀬を経て馬瀬口へと出、軽井沢の追分へと向かったか、加増から平原を経て馬瀬口へと出、軽井沢の追分へと向かったとするルートで、その後の北国街道沿いに東山道がたどったとみるもの。馬瀬口は櫛口とも書き、牧場の入口を示す

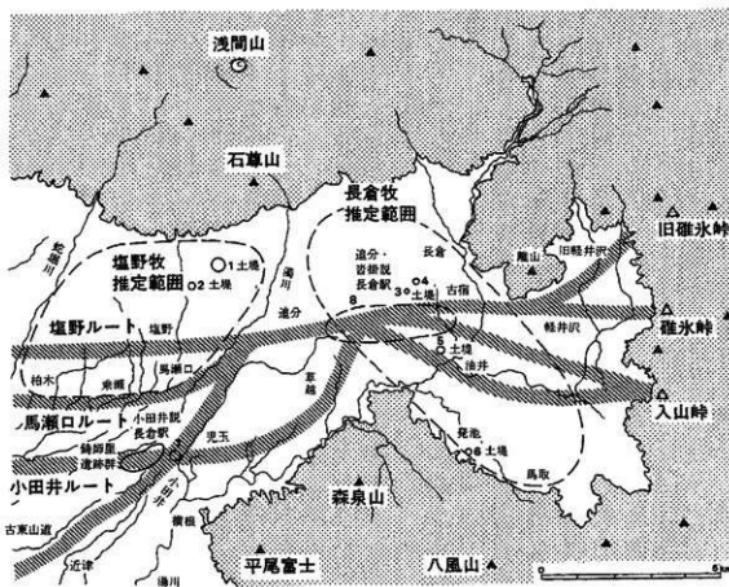


図1 信濃国佐久郡北部の歴史地図（斜線は推定東山道ルート、アミは標高1000m以上）

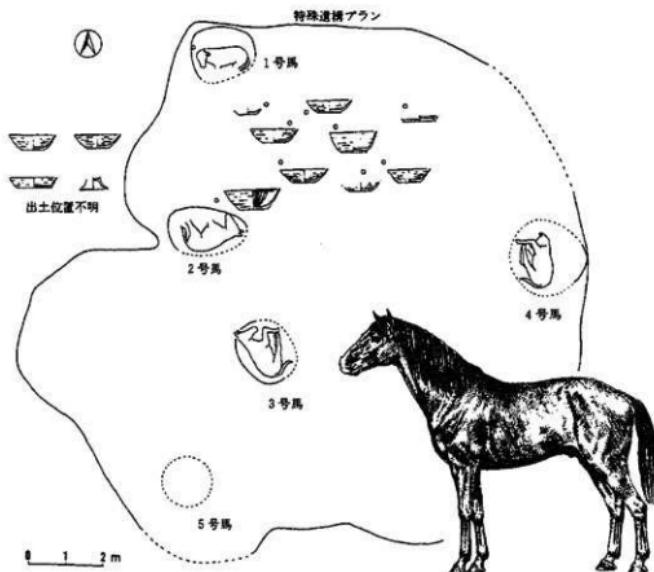


図2 野火付遺跡の埋葬馬の配置と出土した土器

地名とも考えられ、御牧「塩野牧」の入口を東山道が通過したという説である。

- ③ 塩野ルート 小諸市石崎－藤塚を経て、塩野－清万と通過し、追分へとぬけたとするもの。このルートによると東山道は「塩野牧」の中を通過したことになるが、塩野には古刹「真楽寺」があり、また「真楽寺」の東隣の川原田遺跡では、十世紀とみられる寺院跡らしきものも発掘されており、その歴史的環境が重要視される。

これらのいざれが実際のルートなのか、その決着をみるには東山道そのものが、道の構造として時代の決定できる地層や歴史遺物などと一緒に発見されることが第一であろう。また、長倉駅そのものの発見によってもある程度ルートが推定できるものとみられる。

3 考古学的な証拠から考える長倉駅

考古学的な証拠とすれば、小田井から西屋敷周辺の御代田町・佐久市・小諸市にまたがる鎧師屋遺跡群の奈良～平安時代のムラの発掘調査によって、長倉駅との関連も想定できる遺構・遺物も発掘されている。小田井説を支持する有力な証拠として注目される。

ここで発掘された重要なものを列挙するとつぎのとおりである。

- ① 「長倉寺」「長倉○」と書かれた平安時代の墨書き土器が鎧師屋遺跡群前田遺跡から出土した。
② 鎧師屋遺跡群野火付^{のひつけ}遺跡の五頭の埋葬馬（図2）をはじめ、三〇頭分以上にもあたる奈良・平安時代の馬骨が出土した。
③ 溝で囲まれた奈良・平安時代の倉庫群が鎧物師屋遺跡（小諸市分）から発掘された。また、小諸市宮ノ反^{みやのそり}A遺跡では、溝で囲まれた古墳時代末～奈良時代初めの官衙も発掘された（図3）。唐三彩という中国陶器の破片など希少遺物が見つかっている。

これに対し小田井説以外の長倉駅候補地として軽井沢町追分説と沓掛説がある。この両説では、西屋敷～小田井付近に長倉駅があったのでは、碓氷峠という難所をひかえ長倉駅～上野坂本駅の距離が長すぎるという反論が前面に出されている。しかし、いっぽうで、この地域は標高が高く冷涼なため當時では稲作が不可能であることも考えられるが、駅田は必ずしも駅のそばになくともよいという見方に追分説・沓掛説は立っている。

今の中軽井沢にあたる沓掛には、長倉神社がある。また、追分の諏訪神社の貞治三(一三六四)年の奥書の大般若經に「信州佐久郡長倉郷追分大明神」と記されており、この場所において長倉郷を古く南北朝時代にたどることができる。これも長倉駅がこの付近にあったとする傍証となっている。しかし、小田井説と比べると遺跡などの直接的証拠に欠けるところに問題がある。

4 埋もれた東山道

群馬県では実際東山道とみられる道の遺構が、榛名山麓^{はるなさんろく}で何地点か発掘されている。「群馬県史」（群馬県史刊行会一九九一）によるとその特徴として、



図3 宮ノ反遺跡の官衙跡 7世紀末～8世紀前半。小諸市

溝で四角く囲まれた内部に掘立柱建物が建つ。発掘地点には、現在上信越自動車道が走っている。その両側には官衙跡が続いており、未だ眠りについたままだ。

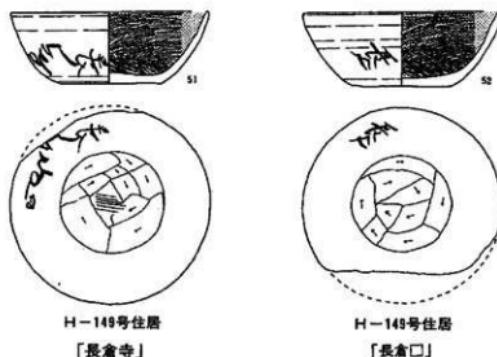


図4 前田遺跡出土の壺蓋土器

- ① 路面幅は四・五~五メートルである。
- ② 硬化面（路面）が三~四面以上確認できる部分がある。
- ③ 両側に溝をもつ。
- ④ 天仁元(一一〇八)年の降下の浅間Bの火山灰に覆われる。
- ⑤ 道の走行はほぼ直線であるが、地形に応じてわずかに迂曲があることがあげられている。

また、上田市小泉では十二メートル幅で二メートル前後の側溝をもち硬化面のある道路状遺構が確認され、東山道の可能性が高いとみられている（尾見二〇〇六）。

東山道の路幅は、当初十二メートルという幅広であったが、九世紀以降、その実用性に応じてその半分程度の幅に縮小されたという（中村二〇〇一）。

群馬県側に軽石「浅間B」を降らせたのは、浅間山の天仁元年(一一〇八)の噴火であり、このとき長野県側の浅間山南麓には「追分火碎流」となった高温の土石が押し寄せた。その噴出物の総量は平成の雲仙普賢岳の三倍にあたると推定され、現在、御代田町東部と軽井沢町地域を平均八メートルの厚さで覆っている。浅間山麓の東山道は、この分厚い火碎流の下に眠っているものと考えられ、今後の発見が期待される。

したがって、天仁元年の噴火後しばらくの間は、浅間山麓の東山道は不通となり、その路線は噴火の影響の少ない場所に変更されたことも十分に考えられる。あるいは湯川の対岸（左岸）、面替-豊昇-茂沢へと一時迂回した可能性もあるだろう。

5 おわりに

「日な塗り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも」

日がかける碓氷の坂を越える時、（残してきた）妻のことが恋しく忘れることができない、という上野国の防人歌が万葉集にある。

政治・経済・軍事、そして人々の情をも乗せた東山道が、佐久をどのように通過し、さらに上田へと入った、その解明の道のりをたどることが古代史解明への大きな課題といえよう。

参考文献

- 尾見智志 二〇〇六 「発掘された道路状遺構」『千曲』一三〇
黒坂周平 一九九九 『東山道の実証的研究』
群馬県史刊行会 一九九一 『群馬県史通史編2 原始古代』
堤 隆 一九九八 「浅間山麓を抜けた東山道」『御代田町誌』歴史編上
中村太一 二〇〇一 「日本古代の駅制と駅路」『古代のみち 一たんけん！ 東山道駅路』

下野国における推定東山道 一近年の古代道路研究の成果から一

(財)とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財センター部長補佐 中山 順

(目 次)

- 1 はじめに
- 2 下野国のあらまし
- 3 研究小史
- 4 主な道路遺跡
 - (1) 側溝のある道路遺構
 - a 鷺久保遺跡
 - b 東谷・中島地区遺跡群
 - (2) 側溝のない道路遺構
 - c 鶴田 A 遺跡
 - d 砂田遺跡 3 区
- 5 駅路の成立
- 6 駅路の衰退
- 7 おわりに

1 はじめに

栃木県(下野国)における古代東山道については、昭和 63 年 12 月から平成元年 2 月にかけて行われた、栃木県那須郡南那須町(現・那須烏山市)鴻野山にある鷺久保遺跡で、推定されていた古代東山道(金坂 1978)の直下で、奈良から平安時代にかけての道路跡が、初めて発掘調査で確認(中山 1989)されてから 20 年が経過した。この間、栃木県内では古代道路遺構の発掘調査事例が増加し、その実態が徐々に明らかにされつつある。

ここでは、下野国における東山道研究の軌跡を一瞥し、これまでの発掘調査によって明らかになってきた古代道路遺跡を幾つか紹介して、律令国家が行った地方支配の実態を垣間見ることにしたい。

2 下野国のあらまし(第 1 図)

下野国における東山道の様子を『延喜式』や『和名抄』に見ると、下野国は七道中の東山道に属し、税を京に運ぶ行程は「上り 34 日、下り 17 日」と規定されていた。また、課税基準(人口や耕地面積)によって、大国・上国・中国・下国に分けられたなかの「上国」とされ、下野国の領域は、

陸 奥



第1図 下野国内の東山道推定ルートと関連遺跡位置図

現在の栃木県域とほぼ一致している。『和名抄』に「國府在都賀郡」とある下野国府については、栃木市田村町で発見(大金ほか1979~89)され、現在は国指定史跡となっている。

下野国内の行政区画は、京に近い順に足利郡(4郷)・梁田郡(2郷)・安蘇郡(4郷)・都賀郡(10郷)・寒川郡(3郷)・河内郡(10郷)・芳賀郡(14郷)・塩屋郡(4郷)・那須郡(11郷)の9郡(62郷)に分けられているが、各郡の領域については判然としない。また、郡衙は各郡に設置(9郡中、安蘇と都賀郡衙は比定地未詳)されたほか、駅家が9郡中5郡に7駅(足利郡の足利駅、都賀郡の三鷹駅、河内郡の田部駅と衣川駅、芳賀郡の新田駅、那須郡の磐上駅と黒川駅に各10匹)、伝馬が5郡(阿蘇郡・都賀郡・芳賀郡・塩屋郡・那須郡に各5匹)が置かれた。

また、大和東大寺戒壇院と筑紫觀世音寺戒壇院とともに「日本三戒壇」の一つと称される下野藥師寺(7世紀末)と国ごとに建てられた官寺である下野国分僧寺(金光明四天王護國之寺)及び下野国分尼寺(法華滅罪之寺)は、現在の下野市内にあって、それぞれが国指定史跡となっている。

3 研究小史

下野国における古代東山道の研究は、文献史学や民俗学的な方法によって進められ、古くは江戸時代の木曾武元『那須拾遺記』(木曾 1733)や河野守弘『下野国誌』(河野 1848)に始まり、次いで明治時代の吉田東伍『大日本地名辞書』(吉田 1903)や柳岡良弼『日本地理志料』(柳岡 1903)、大槻如電『駅路通』(大槻 1911)のほか、土屋喜四郎(土屋 1931)、池沢繪園(池沢 1932)、井上通泰(井上 1943)、直良信夫(直良 1956)、蓮実 長(蓮実 1965他)などの先駆的な業績がある。

その後の研究としては、新たに歴史地理学的な方法を取り入れた足利健亮(足利 1973)、金坂清則(金坂 1975他)、高崎 寿(高崎 1976他)、柏瀬順一(柏瀬 1983他)、木下 良(木下 1990他)、木本雅康(木本 1990他)、田口巳喜男(田口 1990他)、井上 澤(井上 1995他)などによる研究がある。

従前の研究は、文献史学・民俗学・国文学・歴史地理学的な方法によって、駅家の所在や駅路、いわゆる所謂伝路の道筋等について検討されてきたが、駅家所在の比定については根底となる『延喜式』や『和名抄』に所載されている駅名に若干の異同がみられ、その一部は、都賀郡に置かれた「田部駅」が『延喜式』の流布刊本には「田郡駅」とされ、高山寺本『和名抄』には、駅名を足利・三嶋・田部・衣川・日新・磐上・黒川とされるなど、史料によって「三鷹が三嶋」、「田部が田郡」、「新田が日新」とあるため、その解釈を巡って多くの説が提唱してきた。

本来であれば、ここで諸説の内容を整理し、問題点を明確にしておくことが必要であるが、史料に所載された内容を「転訛」であるとか「誤記」であると批判的に検討するだけの用意がないため、これらの詳細な内容については、木下 良(木下 1990b)、木本雅康(木本 1996・2000)に委ねることとし、以下に駅家の所在比定地に係る主な説を①足利駅、②三鷹駅、③田部駅、④衣川駅、⑤新田駅、⑥磐上駅、⑦黒川駅の順に列挙する。

A 河野守弘『下野国誌』

- ①足利郡 余戸駅家郷 ②都賀郡 三鴨駅家郷 下津原 ③多功 ④河内郡 衣川駅家郷
石井 ⑤芳賀郡 新田郷 桜野村上新田 ⑥那須郡 石上郷 石上村 ⑦那須郡 黒川郷
黒川村

B 吉田東伍『大日本地名辞書』

- ①足利郡 駅家郷 足利町 ②都賀郡 三鴨郷 駅家郷 岩舟村下津原 ③都賀郡 高栗
(東)郷 明治村多功 ④河内郡 衣川・駅家郷 石井・岡本付近 ⑤芳賀郡 新田郷 熱
田村 ⑥那須郡 石上郷 石上村 ⑦那須郡 黒川郷 黒川村

C 大槻如電『駅路通』

- ①足利郡 駅家郷 足利町 ②都賀郡 三鴨郷 下津原村 ③都賀郡 駅家郷 多功村
④河内郡 衣川郷 石井村 ⑤芳賀郡 新田郷 葛城村長者平 ⑥那須郡 那須郷 湯津上
村 ⑦那須郡 黒川郷 黒川畠村

D 高崎 寿『郷土史話十二章』

- ①足利郡 駅家郷 足利市縁町一丁目 ②都賀郡 三鴨郷 岩舟町新里 ③都賀郡 駅家
郷 栃木市田村町 ④河内郡 駅家郷 上三川町西木代 ⑤芳賀郡 新田郷 高根沢町大谷
⑥那須郡 石上郷 湯津上村湯津上 ⑦那須郡 黒川郷 那須町伊王野

E 金坂清則『古代日本の交通路』Ⅱ

- ①足利郡 駅家郷 足利市十念寺跡付近 ②都賀郡 駅家郷 岩舟町豊岡 ③都賀郡 上
三川町多功 ④河内郡 駅家郷 宇都宮市上平出字木ノ川 ⑤芳賀郡 新田郷 南那須町鴻
野山字既久保 ⑥那須郡 石上郷 湯津上村湯津上熊野神社付近 ⑦那須郡 黒川郷 那須
町伊王野字大秋津

このような中で、高崎 寿(高崎 1976・1978)と金坂清則(金坂 1978)の研究は、駅家の所在地比定と駅路の道筋全体をより具体的に詳述している点で高く評価される内容である。特に、金坂清則が推定した駅路の一部は、栃木県那須郡南那須町(現・那須烏山市)鴻野山にある既久保遺跡として発掘調査が行われ、幅の広い直線的な道路跡が栃木県内で初めて確認された(中山 1989 他)。

これ以降、考古学的な方法である発掘調査によって古代道路跡の事例が増加するが、考古学関係者に「平行する二条の溝」が古代道路の側溝であると周知される以前は、発掘された平行する二条の溝は「正体不明の遺構」とされていたこともあったが、現在では側溝を伴わなくとも所謂「波板状凹凸面」や「硬化面」、「轍の痕跡」、「乾きが早くサラサラ？してやや砂質で硬い部分」などが検出されれば、道路跡であると判断ができる状況になった。

一方、駅家については、大槻如電が新田駅と比定した長者ヶ平遺跡の発掘調査で、南面する正殿を中心に長大な東脇殿と西脇殿をコの字型に配置し、南門(八脚門)をも置いた大型掘立柱建物跡群が確認されている(板橋 2007)。新田駅家の推定地を発掘調査した結果、このようなコの字型配置の大型掘立柱建物群が発見されたが、それが駅家になるのか、典型的な地方官衙(芳賀郡衙別院)

となるのか、或いは郡衙とは異なる官衙となるのか、更には、それらの複合的な官衙となるのかについての結論は、今後の更なる研究に委ねられる事となった。なお、これまでに、栃木県内でコの字型配置の大型掘立柱建物群が発見されているのは、下野国府跡の政庁、上神主・茂原官衙遺跡の政庁がある。このうち長者ヶ平遺跡とほぼ同時期、同規模で駅家推定地でもある上神主・茂原官衙遺跡については、河内郡衙跡と結論付けられた(深谷・柴木 2003)。

その他としては、「烽家」と墨書きされた須恵器坏形土器が宇都宮市飛山城跡(今平1997)のSI-18から出土したことで注目されている。しかし、造構としての烽家が発見されたのではないので、その実態については不明な部分が多い。以上、東山道研究の軌跡を一瞥した。

4 主な道路遺跡（第2図）

これまでの発掘調査で発見されている主な古代道路遺構は、第2図（▲印）に示した1三輪仲町遺跡、2新道平遺跡、3厩久保遺跡、4南原遺跡、5日枝神社南遺跡、6釜根遺跡、7上野遺跡二次調査区、8上野遺跡一次調査区、9東谷・中島地区遺跡群、10折本遺跡、11三ノ谷遺跡、12諏訪山北遺跡、13北台遺跡、14北台2号遺跡、15鶴田A遺跡、16砂田遺跡3区のほか、A下野国府跡やF上神主・茂原官衙遺跡、H那須官衙遺跡などがある。これらの道路遺構は、(1)側溝がある事例と(2)側溝のない事例とに分けられる。前者は、「平行する二条の溝=側溝」であるが、後者は所謂「波板状凹凸面」や「硬化面」、「轍の痕跡」、「乾きが早くサラサラ?してや砂質で硬い部分」等々が検出されれば道路跡であるとの認識根拠となっている。

前記した遺跡のうち(1)側溝がある道路遺構としては1三輪仲町遺跡、2新道平遺跡、3厩久保遺跡、4南原遺跡、5日枝神社南遺跡、6釜根遺跡、7上野遺跡二次調査区、8上野遺跡一次調査区、9東谷・中島地区遺跡群(杉村遺跡)、10折本遺跡、11三ノ谷遺跡、12諏訪山北遺跡、13北台遺跡、14北台2号遺跡、A下野国府跡やF上神主・茂原官衙遺跡であり、(2)側溝のない道路遺構としては15鶴田A遺跡、16砂田遺跡3区、H那須官衙遺跡である。

また、古代道路遺構は、現在の直線的な行政界となっている場合が多い。なお、側溝の有無にかかわらず、路面は削平されていることが多く、検出し難い状況にある。

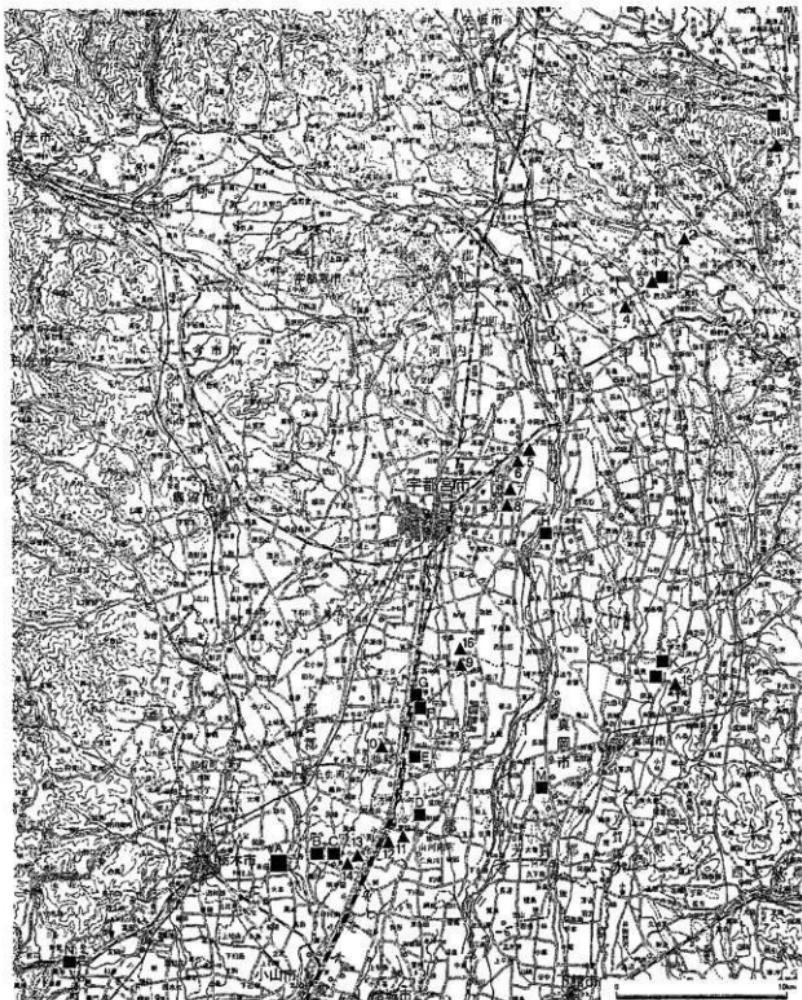
以下に、特徴的な道路遺跡を紹介する。

(1) 側溝のある道路遺構

a 倉久保遺跡（第2図3 第3図）

遺跡は、那須郡南那須町(現・那須烏山市)大字鴻野山字厩久保地内にある。ここは、南流する鬼怒川左岸の氾濫原(田原段丘面)が喜連川丘陵へと遷移するところで、付近は概ね北西から南東方向に細長く延びる台地と小浸食された低地が約25m前後の高低差を以って葉脈状に形成されている。

東山道の推定ルートは、この起伏のある喜連川丘陵に対して概ね直交し、塩谷郡氏家町(現・さ



1. 三輪仲町遺跡 2. 新造平遺跡 3. 斎久保遺跡 4. 南原遺跡 5. 日枝神社南遺跡 6. 錦糸遺跡 7. 上野遺跡 2次調査区 8. 上野
 遺跡 1次調査区 9. 東谷・中島地区遺跡群 10. 折木遺跡 11. 三ノ谷遺跡 12. 濑昉山北遺跡 13. 北台遺跡 14. 北台2号遺跡
 15. 鶴田A遺跡 16. 鶴田遺跡3区 A. 下野国府跡 B. 下野国分寺跡 C. 下野國分尼寺跡 D. 下野瀬御寺跡 E. 多功遺跡 F. 上
 神土・茂原官街道跡 G. 西下谷田遺跡 H. 稲山城跡 I. 長者ヶ平遺跡 J. 那須官街跡 K. 安法山遺跡 L. 大内堯寺跡 M. 中村遺
 蹤 N. 呂同遺跡
 [国土地理院 1:200000 地勢図 宇都宮(平成10年)・同水戸(平成11年)・同日光(平成9年)・同白河(平成13年)を合成]

第2図 道路遺跡と寺院・官衙位置図

くら市)八方口付近から那須郡南那須町(現・那須烏山市)上川井付近までの直線的な小道(区間距離約6km)にあてられている。この小道は、幅2m前後のもので、八幡太郎義家(跡奥守兼鎮守府將軍)関連の伝承とともに古くから「將軍道」とも称され、今なお供用されている。なお、この小道は、現在の那須烏山市とさくら市との行政界となっている。

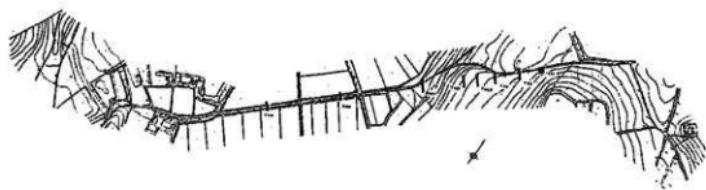
調査は、東山道推定駅路の直下に道路遺構が存在するであろうことを予測したうえで、現地における地形変化の中で道路遺構を発見し得る可能性の最も高い地点や予測どおりに道路遺構が発見された場合、その起伏のある地形条件下で道路遺構の実体がより明確に把握し得る地点等々について十分考慮したうえで、低湿地(現水田)部分や丘陵の裾部(登り口)、丘陵の中腹部(斜面)、丘陵の頂上部、丘陵間に僅かに見られる鞍部などにトレーナーを設定し、断面観察を主体とした。その結果、道路の構築状態や修治の様相から大きく4期に区分ができる、各期の年代についても出土遺物から概ね明らかにすることができた。

「低湿地部分」

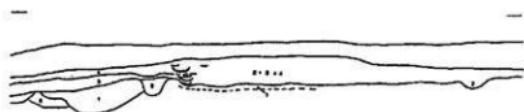
- (I期) 作道当初のもので、自然堆積層の上に砂・小礫・七本桜スコリア・今市スコリア等の混合土を盛土して全体に硬くなっている。断面形状は、中央部が僅かに凹む弓状であり、硬化層の厚さは15cm前後である。道路の幅については、農耕等により削平を受けていたため全体幅は不明であるが、遺存する部分で約5.45m+aである。
- (II期) ロームを主体とした中に砂・小礫・今市スコリア・黒色土等の混合した硬質な淡黄褐色土層であるが、I期のものよりやや硬質である。断面形状は、中央部が高いレンズ状であり、層厚は中央部の厚い部分で約0.3mである。道路幅については、I期目同様に削平されているため全体幅は不明であるが、遺存する部分は約5.25m+aである。
- (III期) 砂・小礫・今市スコリア・ローム等の混合土が薄く縞状に突き固められた褐色土層である。中央部での層厚は約0.2m、計測し得る道幅は約4.3mであり、形状はII期目の遺構を覆うような断面である。
- (IV期) 砂・ロームの混合土が突き固められたものである。層厚は、0.8~0.1mと薄く平坦で計測し得る道幅は約4.3mである。

「丘陵裾部」

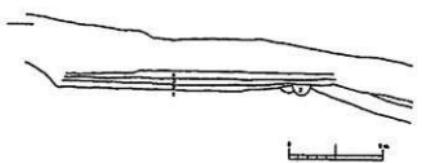
- (I期) 黒色土を路面とし、両側溝を備える道路である。断面に見る硬化した部分の厚さは0.1m前後であるが、都を背にして右側に行くに連れ硬化部は不明瞭になる。断面形状は、中央部が凹む。道幅は約12mで、側溝は、不整な半円形状断面である。側溝の規模は、II期目以降の修治等により原形は不明であるが、計測し得る範囲では幅2m+a、深さ0.6m+aである。なお、これ以前の側溝もあるが、詳細は不明。
- (II期) ローム主体の小川スコリア混合土を路面とし、両側溝を備える道路である。道幅は約6mで、都を背にして左の側溝は幅約0.6m、深さ約0.3m、右の側溝は幅約0.6m、深さ



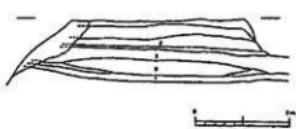
尻久保遺跡トレンチ位置図 (S=1/8000)



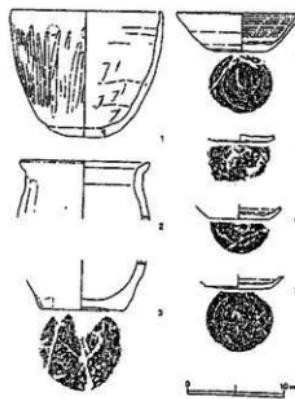
T108 断面図 (S=1/100)



T101 断面図 (S=1/100)



T91 断面図 (S=1/100)



T101 出土遺物実測図 (S=1/5)

第3図 尻久保遺跡関連図

約 0.16m である。路面の層厚については、ロームと小川スコリア等の混合土で版築状に突き固められたものが 0.6m 前後の厚さで確認されている。この層厚にはⅡ～Ⅳ期の路面が含まれているが、土質が近似しているため各期を明確に分層することは困難であった。

年代は、Ⅰ期は 8 世紀代(8 世紀前半)、Ⅱ期は 9 世紀前葉、Ⅲ期は 9 世紀後半、Ⅳ期は 10 世紀代(古代末期)と推考される。

b 東谷・中島地区遺跡群（第2図9 第4図）

東谷・中島地区遺跡群は、宇都宮市の中心地から南南東へ約 8km の宇都宮市東谷町地内に所在する。ここは、南流する鬼怒川と田川に挟まれたところで、低位な台地を基本とするが、田川の支流によって形成された狭小な低湿地が幾筋か見られる。

平成 7 年度以降、大規模な発掘調査が行われてきた結果、古墳時代中期の掘立柱建物跡を伴った所謂「豪族居館」の存在が明らかとなり、200 軒を超す古墳時代中期を中心として後期に至る集落跡も確認されている。また、全長 100m の 笹塚古墳(県指定・前方後円墳)をはじめ、鶴舞塚古墳・松の塚古墳・双子塚古墳・権現塚古墳群・原古墳群などが確認されるなど、古墳時代中期の動向には注目すべき点が多いが、奈良・平安時代の遺構は、道路遺構以外には僅少である。

道路遺構は、南北方向に形成された低位台地と狭小な低湿地の上を南西から北東方向に横切るような状態で発見されている。明確な路面を発見するには至らなかったが、側溝は比較的良好な状態で確認されている。側溝の平面的な形状は、まさに「平行する二条の溝」であり、全体としては直線的な状態であるが、微視的に見れば、僅かに歪みが見られる。側溝内覆土の堆積状態からは、作道後 2 回の大規模な改修工事があり、Ⅰ～Ⅲ時期の道路遺構が確認されている。

(I 時期目の道路遺構)

I 時期目の側溝は、6 世紀初頭に降下したとされる群馬県榛名山ニツ岳の火山灰層を掘り込んで作られている。

①検出された道路の幅は、路面が既に削平されているため両側溝間の心々距離での計測値となるが、低位台地上で約 14m、低湿地部分では 10m～12m を測る。低位台地上の幅が広く、低湿地部分での幅が狭い点が特徴的であり方を示している。

②側溝の形状は、Ⅱ 時期目の側溝によって壊されているため、僅かに底面の一部が見られるだけの部分が多いが、低位台地上における遺存状態の良好な部分から判断すると、長方形状土坑が連続的に掘り込まれたような状態であり、その底面には凹凸が見られることから必ずしも平坦な状態ではなかつたことが窺える。なお、基本的な断面形については、両側壁がほぼ垂直に掘り込まれている箱形状断面であったと考えられる。

③側溝の規模は、低位台地上での上幅が 1.2m～1.3m、低湿地部分での上幅は約 1.8m を測る。

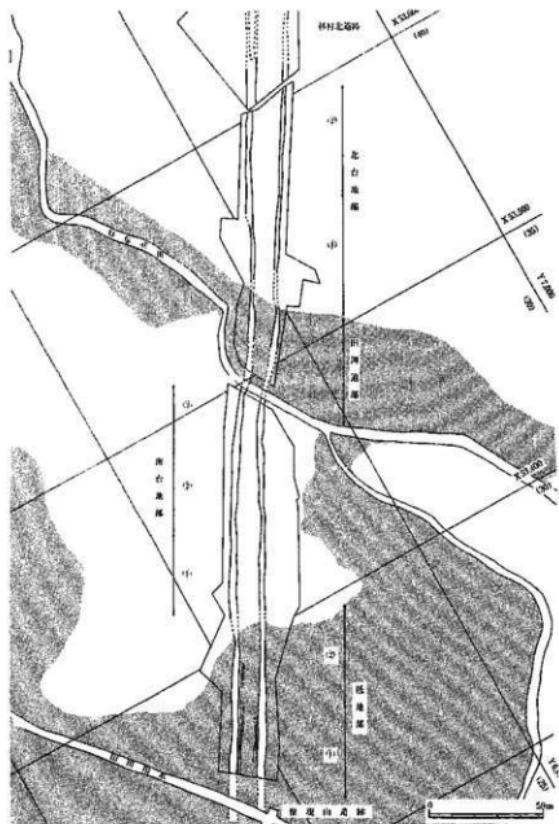
また、深さは、低位台地上・低湿地部分共に確認面から0.4m～0.6mである。低位台上の幅に比べ低湿地部分の幅がやや広くなっている点については、低湿地部分における側溝の両壁に崩れが見られることから度重なる冠水の結果、低位台上より広くなっているものと考えられる。

④出土遺物とI時期の年代については、8世紀中葉頃に位置づけられる須恵器壺形土器(宇都宮市欠ノド窯)が、側溝の底面から出土していること。既に東山道の時期的な変遷が明らかになっている南那須町腰久保遺跡や国分寺町北台遺跡の成果、さらには下野国府の成立時期などから判断すると、I時期目の道路は、8世紀前半に作道されていたと考えられる。

(II時期目の道路遺構)

II時期日の側溝は、I時期目の路肩付近の一部を残し、そこに重複するような状態で側溝の外側部分を切るように新たに掘り込まれていることから、II時期目の道路の幅は、結果的に僅かに拡幅された状況になっている。

①検出された道路の幅は、I時期目同様に路面が既に削平されているため両側溝間の心々距離での計測値となるが、低位台地上で約15m、低湿地部分では12m～13mを測る。低位台地上の道幅が広く、低湿地部分での幅が狭い点は、I時期目の様相に共通した特徴的なり方を示している。



第4図 東谷・中島地区遺跡群の推定東山道全体図(トーン部は低地)

②側溝の形状は、I時期目の側溝の外側部分を切るように作られていると同時に、その幅がI時期目に比べてかなり広くなっている点特徴的である。側溝の断面形は、I時期目の底面がほぼ平底状であるのに対し、丸みを持って大きく開く舟底状になっている。

③側溝の規模は、低位台地上での上幅が1.8m～2.1m、低湿地部分での上幅は2.3mを測る。なお、深さは、I時期目とほぼ同様の0.3m～0.63mであるが、I時期目の側溝に比べるとやや深めとなっている部分が認められる。その底面については、I時期目の側溝同様に必ずしも平坦な状況ではない。

④出土遺物とII時期目の年代については、8世紀後半に位置づけられる須恵器坏形土器(益子町谷津入窯)が側溝内から出土していることから、II時期目の道路は大きく8世紀の後半に供用されていたと考えられる。

(III) 時期目の道路遺構

III時期目の側溝は、調査区南西端の低位台地上において、I・II時期目の両側溝の内側に検出されている。

①検出された道路の幅は、I・II時期目同様に路面が削平されているため両側溝間の心々距離で約6.3mを測る。

②側溝の形状は、低湿地部分では検出されていないため明確にし得ないが、路面の幅と共に側溝の規模が全体的に縮小され、I・II時期目の両側溝の内側に、概ね平行して直線的な状態で検出されている。側溝の断面形は、I時期目の側溝を縮小したような箱形状断面に近いが、丸みを持つ舟底状の部分も見られるなど一様なあり方を示さない。

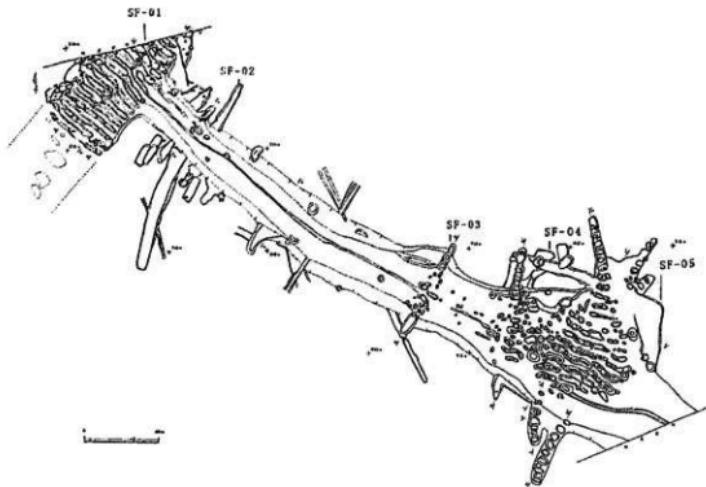
③側溝の規模は、低位台地上部分に検出された長さ約34m、上幅が0.65m～0.8m、深さは約0.3m、底面の幅は約0.6mを測る。

④出土遺物とIII時期目の年代については、側溝内から土師器坏形土器の小片が僅かに出土しているが、年代決定の根拠とするには若干不安を伴う。III時期目の側溝は、基本的にI・II時期目の両側溝の内側において検出されているが、その一部においてII時期目の側溝と重複し、それを切っていることから最も新しい時期のものであることが確認されている。従って、II時期目の側溝より新しいこと、道路幅が約6m(既久保遺跡の成果)であることから大きく9世紀代に供用されていたと考えられる。

(2) 側溝のない道路遺構

c 鶴田A遺跡(第2図15 第5図)

ここは真岡市鶴田・西田井地内で、五行川左岸の高低差の少ない台地上にある。また、本遺跡の北西約2km付近には、K堂法田遺跡とし大内廢寺跡がある。本遺跡で注目されるのは、大溝を横切る道路が5本確認され、道路が大溝(SD-30)と重複する部分にだけ波板状凹凸面が検出さ



SD-30・SF-01～05 道構配置図 (S-1/400)

第5図 鶴田A遺跡Iの道路遺構(波板状凹凸面)

れたことである。

大溝(SD-30)は、概ね北西から南東方向を向いており、その規模は上幅6m前後、下幅1m～2m、深さ0.6m～1.2mである。大溝の時期は、底面を中心に出土している須恵器や土師器から奈良時代と考えられる。

道路遺構は、調査区の北端部と南端部付近に5基発見されている。各道路の幅員については、いずれも調査区内において側溝が確認されていないため明確にはし得ないが、波板状凹凸面の状況から判断すると北端部付近の道路(SF-001)の幅員は約6mであったと考えられ、南端部付近の道路(SF-005)の幅員については当初12mと考えていたが、小規模な道路が同一場所で繰り返し作り替えられた結果であるとも考えられる。

道路の時期については、南端部付近の道路(SF-005)が奈良時代、北端部付近の道路(SF-001)が平安時代のものと考えられる。波板状凹凸面は、大溝の両縁から側面、底面に至る間に造られており、その窪んだ部分には砂質土、小砾とともに大量の須恵器片と若干の土師器片が充填じきさんされていた。また、大溝内の波板状凹凸面が途切れた両縁部分には、硬化面と表現するほど硬くはないが、地山とは明らかに異なるサラサラとした感じのするやや硬い面も検出されている。

SF-002・003・004はSF-001のような波板状凹凸面は確認されなかったが、SD-30の側壁部に小規模で簡易な階段状の凹凸面が構築されている。覆土は硬くしまった砂質土で波板状凹凸面と同様である。SF-002・003はSD-30に対して概ね直交するものである。道路遺構の時期は大

溝(SD-30)の埋没過程や出土した遺物等から概ね8世紀後半以降とされる。SF-002の確認できる長さは約1.5mである。規模はSD-30の側壁部分を幅0.8m、深さ0.20m～0.30m掘り下げている。SF-003の大溝を亘る全長は約8mである。規模はSD-30側壁部分を幅0.6m～0.8m、深さ0.20m～0.40m掘り下げている。SF-004の大溝を亘る全長は約11.7mである。規模はSD-30側壁部分を幅0.7m前後、深さ0.20m～0.40m掘り下げている。ややSD-30を斜めに横切る状態である。このようなSF-002・003・004は、その規模、形状の様相からして、一人人が往来することを目的として造られた道路であると考えられる。

これらの波板状凹凸面(SF-001～005)は、大溝を渡る部分の水はけが悪く脆弱であるために、その部分を強化する目的で造られたものと考えられる。従って、ここでの波板状凹凸面は道路の修治ではなく基礎工事を目的としている。ここで発見された道路遺構の性格については、この場で即云々し得るものではないが、明らかに従前の東山道ルートからは、大きく離れた位置において発見されたものであることや比較的近い位置(北西約2km)には、堂法田遺跡や大内庵寺跡があり、南西約10km付近の鬼怒川左岸には芳賀郡衙の郡倉別院とされる真岡市中村遺跡の存在も確認されていることなどから所謂「伝路」の可能性が考えられる。

D 砂田遺跡3区(第2図16)

ここは宇都宮市屋板町字九十九瀬390-1他に所在し、東谷・中島地区遺跡群で確認されている道路跡の北西付近に位置する。この道路遺構については、調査区内において側溝は発見されていないが、硬化面とその下から波板状凹凸面が発見されていることから道路遺構と判断したものである。時期を示す明確な資料はないが、付近の堅穴住居との重複関係や僅かな出土遺物から大きく7世紀末から8世紀後半の所産のものと推定される。

硬化面については、削平を受けているため、その最上面(路面)の様相は不明であるが、砂を含んだ土で硬く締まった状態である。硬化面の平面形は、凸レンズのような不整な形状であり、その規模は、長さ20.4m、最大幅約7.2mである。なお、この幅については、二組の硬化面が一部で僅かに重複している状況にあり、一つの幅は4m前後である。

硬化面の下には、波板状凹凸面が形成されている。硬化面同様に、大きく二組の波板状凹凸面が僅かに重複している。波板状凹凸面は、二組とも硬化面同様に砂を含んだ土で硬く締まった状態であるが、それらの新旧関係については判然としない。

ここでの硬化面と波板状凹凸面については、波板状凹凸面の長い部分では硬化面の幅が広く、逆に波板状凹凸面の短い部分では硬化面の幅も狭くなっていることから、双方一体の関係にあると考えられること。発見された場所が地形的に平坦な部分であること。さらに、それらの範囲が限定された部分だけに確認されていることなどから、ここでは、道路の「基礎工事」と言うよりは路面の傷んだ部分を修治した「修繕工事(道替請)」であると考えられる。

5 駅路の成立

下野国内の駅路の成立に関わる具体的な史料は特には見られないが、藤原宮跡出土木簡に「下毛野国足利郡波自可里鮎大賛一古參年十月廿二日」大宝三年(703)があることから、この時期或いはそれ以前の段階での成立とも考えられよう。また、木下良(木下 1990b)は、史料の信憑性の問題はあるが『上野国交替実録帳』には「無実」の戸籍中に庚午年(679)の 90 卷があり、その内訳は「管郷別捌拾陸駅家戸肆」とあるから 7 世紀後半段階で駅家があった可能性を述べている。これをして、下野国内でも同様な動きがあったとすれば、この段階で成立した可能性も考えられる。

次に、考古学の成果による道路遺構の様相を幾つか見ると、先ず、駅路の推定地を発掘した廻保遺跡では、Ⅰ期の側溝から出土した土師器壺形土器の特徴から造道当時の時期を 8 世紀前半とした。また、Ⅰ期の道路の幅員が約 12m である。北台遺跡(上野川 1993・1997)では、側溝から出土した土師器壺形土器が、7 世紀後半から 8 世紀初頭に位置づけられることから、造道の時期を 7 世紀第三四半期としている。また、道路の幅員は約 12m である。東谷・中島地区遺跡群では、側溝の底面から出土した須恵器壺形土器が 8 世紀中葉頃に位置づけられることから、それ以前の段階と考えられている。また、道路の幅員は、低位台地上で約 14m、低湿地部分では 10m ~ 12m である。上野遺跡(今平 1998)では、側溝の覆土中層から「泉」と墨書きされた 9 世紀中葉頃の須恵器壺形土器が出土していることから、その時期を 9 世紀中葉以前と判断している。また、道路の幅員は 8 ~ 15m である。以上、文字資料と発掘資料から造道年代を見ると、早ければ 7 世紀後半からとなり遅くとも 8 世紀前半の時期となる可能性は十分考えられ、下野國府のⅠ期の年代が 8 世紀前半(田熊 1988)、那須官衙遺跡も 8 世紀前半(大橋 1998)と考えられていることから、その頃には下野国内に道路網が整備されていたと考えられる。

ただし、道路遺構の年代は、出土遺物の年代観に基づいて考えられてきたが、各地の道路遺構には修治や掘り返しの痕跡が確認されていることから、遺物がどの段階で側溝に入ったのか不明な点があり、出土遺物が道路遺構の年代を示すものとはなりにくいという問題が残る。また、駅路については、両側溝を備え、幅の広い直線的な計画道路であるとの認識が定着しつつあるが、現在の国道、都道府県道、市町村道、農道、私道の違いは、道路標識が無ければ、見ただけでは判断ができないように、発見された古代道路遺構のどこにも、東山道とか駅路とか伝路とかは書かれていないのである。従って、今後の発掘調査によって、道路遺構の性格や成立の時期を確定できるような好事例が得られることに期待したい。

6 駅路の衰退

駅路の衰退を知る具体的な史料は見られないが、これについては発掘調査による成果から検討する。先ず廻保遺跡で見ると、大きく 4 時期に分けられたその最終段階であるⅣ期は、これ以降の修治の痕跡が見られないもので、時期的には 10 世紀以降中世以前とした。

次に、東谷・中島地区遺跡群の道路遺構では、Ⅲ期としたものが9世紀代とされ、それ以降明確な修治の痕跡は見られず、1108年の火山灰(浅間B)によって完全に被覆されていることから、それ以前には廃絶されていたことが確認されている。また、下野国府と那須官衙跡から見ると、下野国府跡の終末が11世紀中であるとされ、那須官衙跡では10世紀代で機能しなくなっている。このような事例から、10世紀代には衰退し、11世紀には廃絶したと見ることができよう。

7 おわりに（第6図）

東山道とは、古代日本の律令国家が7世紀後半以降、中央集権的国家体制を確立していく中で整備を進めた七つの地方と主要幹線道路(七道)の一つで、都(中央)と近江国・美濃国・飛騨国・信濃国・上野国・下野国・陸奥国・出羽国の国府とを結ぶ最長、最古の国道(官道)である。

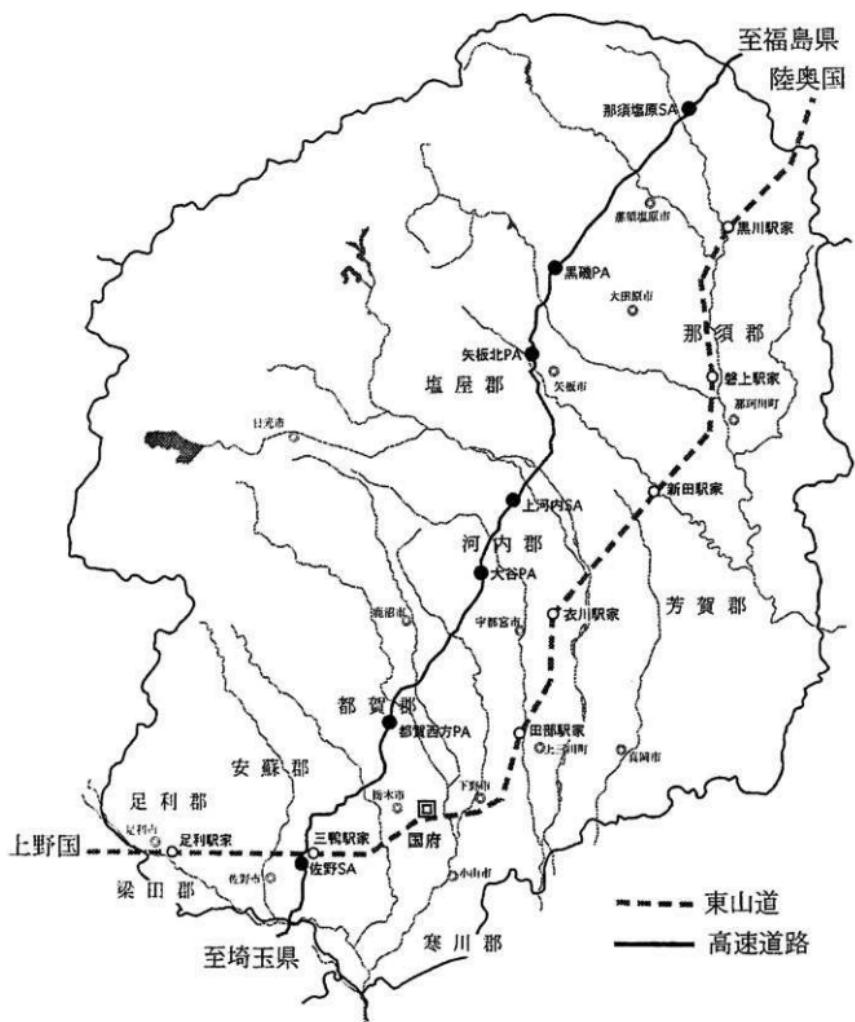
道は、本来、人が自由に行き交うものであるが、東山道は、特定の重要且つ緊急な任務をおびた役人や地方での反乱を鎮圧するための軍隊など、ごく限られた人々が中央と地方間を速やかに移動するため、30里(約16キロ)ごとに中継基地として「駅家」を置き、駅家には駅馬10疋を備え、宿泊や食糧を供給したとされている点で、現在の高速道路とサービスエリアは、これに近い。

この東山道を含む古代官道の研究は、これまで文献史学の立場からは法制史料に基づく検討が行われ、昭和40年代の後半頃までは、自然発生的な部分が多く、江戸時代の幹線道路でも幅約3.6m程度であったことから、地形の変化に左右された曲折の多い、幅1～2m程度の小道であったと考えられていた。しかし、これに対して歴史地理学の立場からは大縮尺の地図や空中写真的分析が、考古学の立場からは発掘調査によって、その実態が解明されるようになってきた。

栃木県内では、既久保遺跡で、両脇に側溝が備えられた直線道路が500mにわたって確認され、しかも奈良時代は幅約12m、平安時代は幅約6mの壮大な東山道が初めて姿を現した。また、東谷・中島地区遺跡群の道路遺構では、両脇に側溝が備えられた直線道路が約1500mにわたって確認され、奈良時代が低位台地上で14m、低湿地部分では10～12mあり、平安時代は6mであることが確認された。

その後、各地で道路遺構が発見され、平野や台地上だけではなく、丘陵と低地が混在する丘陵地域においても、幅の広い直線道路であることが確認され、結果的に律令国家の地方支配が、確実に遠国の大下野国まで浸透していたことを裏付けることとなった。

以上、近年の考古学の成果によって、東山道の実態が解明されつつあるが、今後は『延喜式』にある足利郡の足利駅、都賀郡の三鷹駅と田部駅、河内郡の衣川駅、芳賀郡の新田駅、那須郡の磐上駅と黒川駅の発見に期待される。



第6図 東山道の七駅と高速道路のサービスエリア

(引用・参考文献)

- ・木曾武元 1733『那須拾遺記』
- ・河野守弘 1848『下野国誌』
- ・吉田東伍 1903『大日本地名辞書』
- ・鄭岡良輔 1903『日本地理志料』
- ・大槻如電 1911『駅路通』
- ・土屋喜四郎 1931「長者ヶ平の研究梗概」『下野史談』第8巻第8号
- ・池沢椿園 1932「黒川所在考」『下野史談』第9巻第5号
- ・井上達泰 1943『上代歴史地理新考』
- ・直良信夫 1956「三毳駅址」『日本歴史』236
- ・蓮実 長 1965「那須郡の沿革」『下野史談』第20巻 1970「改版 那須郡誌」下野新聞社
- ・足利健亮 1973「那須郡と東山道」藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む』第5集 大明堂
- ・金坂清則 1975「下野国府・田都駅家とこの間の東山道について」『福井大学教育学部紀要(Ⅲ社会科学)』25
- ・金坂清則 1978「下野國」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅱ』
- ・金坂清則 1991「下野」藤岡謙二郎編『東山道の旅役と変貌』
- ・高崎 寿 1976『郷土史話十二章』昭和51年
- ・高崎 寿 1978「一章 東山道」奥田久編『栃木の街道』
- ・柏原順一 1983「下野国足利駅及び周辺の東山道の駅路に関する考察」『毛野 創刊号』毛野古文化研究会
- ・柏原順一 1983「上野国・下野国間ににおける東山道の駅路の性格について~『続日本紀』宝龟二年十月二十七日条をめぐって~」『群馬文化』196 群馬県地域文化研究協議会
- ・大金宣亮ほか 1979～89年『下野国府跡Ⅰ～Ⅴ』栃木県教育委員会
- ・小森哲也 1987「三ノ谷遺跡」「住宅・都市整備公團小山・栃木都市計画事業 自治医科大学周辺地区昭和61年度埋蔵文化財発掘調査」財团法人 栃木県文化振興事業団
- ・田熊清彦 1988『下野国府跡Ⅰ～上器類調査報告』栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第90集 栃木県教育委員会
- ・木下 良 1990a「日本古代律令期に敷設された直線的計画道の復元的研究」平成元年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- ・木下 良 1990b「上野・下野両国と武藏国における古代東山道軌跡の再検討」『栃木史学』4号
- ・木本雅康 1990「下野国那須郡を中心とする古代交通路について(p12～22)」『歴史地理学』148
- ・木本雅康 1992「下野国都賀・河内内郡における古代駅路について」『栃木史学』6号
- ・木本雅康 1993「下野国の古代駅路について」『交通史研究』30
- ・木本雅康 1996「東山道～山坂を越えて～」木下 良編『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
- ・木本雅康 2000「古代の道路事情」吉川弘文館
- ・出口巳喜男 1990「わが町の東山道(一)足利市近間から下野国府への道」『史談』会報第6号

- ・田口巳名男 1991「わが町の東山道（二）三鶴駅家—下野国宿—旧郡駅家」『史談』会報第7号
- ・田口巳名男 1992「わが町の東山道（三）佐野市街地一考」『史談』会報第8号
- ・井上 淳 1995「駅路の区间標点の存在と変向点について」『栃木県考古学会誌』第17号
- ・井上 淳 1996「東山道諸国の行程と下野国の追跡夫像」『栃木県考古学会誌』第18号
- ・真保昌弘 2002「那須郡を中心とした古代道路」『栃木県考古学会誌』第23号
- ・中山 晋 1989「付録 猿野山地区推定東山道確認調査概要」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和63年度）』栃木県教育委員会
- ・中山 晋 1990「栃木県における推定東山道発掘調査概要」『文化財信濃 東山道サミット特集号』第16巻第3・4号
- ・中山 晋 1992「栃木県猿野山地区における「推定東山道確認調査」概要」黒板周平『東山道の実証的研究』吉川弘文館 所収。
- ・中山 晋 1994「栃木県内の古代道路状遺構」『古代交通研究』第3号 古代交通研究会
- ・中山 晋 1997a「下野国と東山道」『古代文化』第49巻第8号
- ・中山 晋 1997b「（連報）杉村遺跡発見の東山道」『考古学ジャーナル』419 ニューサイエンス社
- ・中山 晋 2000「第5章特論 I 東山道関連の道路遺構（5）下野国の古代道路遺構」「道路遺構等確認調査報告」東京都教育委員会
- ・中山 晋 2001a「第4章 第5節 道路遺構（p290～306）「鷺田A遺跡」」栃木県教育委員会
- ・中山 晋 2001b「道路遺跡の調査方法」『古代交通研究』第10号 古代交通研究会
- ・中山 晋 / 藤田直也 2004「下野国」古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店
- ・田代隆 1994「諏訪山・諏訪山北—住宅・都市整備公団小山・新木都市計画事業 自治医科大学周辺地区埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告第147集』栃木県教育委員会
- ・石川均 1997「日枝神社街道跡、日枝神社南古墳発掘調査報告書」河内町埋蔵文化財調査報告書第1集 河内町教育委員会
- ・蓮華敏雄 1993「日枝神社南遺跡ほかの調査事例（河内町）」笠根遺跡『シンポジウム「下野の東山道」資料』栃木県歴史文化研究会
- ・亀田幸久 1999「杉村北遺跡 一般国道4号（北関東自動車道上三川インターチェンジ）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告第221集』栃木県教育委員会
- ・安藤美保 2000「杉村・磯岡・磯岡北 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅱ」『栃木県埋蔵文化財調査報告第241集』栃木県教育委員会
- ・藤田直也 2002「東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡（1区・2区・3区）」『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第265集』栃木県教育委員会
- ・藤田直也 2003「東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区」『栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第274集』栃木県教育委員会
- ・秋元陽光 / 保坂知子 1999「上三川町埋蔵文化財報告第19集 上神主・茂原遺跡I—平成7～9年度調査概報」上三川町教育委員会
- ・梁木誠 / 深谷昇 2002「栃木県上神主・茂原遺跡の道路状遺構」『古代交通研究』第11号 古代交通研究会

- ・櫻木誠 / 深谷昇 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告書 27・宇都宮市埋蔵文化財調査報告 47、上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
- ・今平利幸 1997『飛山城跡第IV次確認調査概報』宇都宮市教育委員会
- ・今平利幸 1998『上野遺跡—推定東山道関連遺跡—』宇都宮市埋蔵文化財報告書第 43 集 宇都宮市教育委員会
- ・宇都宮市教育委員会 1996『シンポジウム古代国家とのろし』
- ・上野川勝 1993『北台遺跡（推定東山道）』『国分寺町埋蔵文化財調査報告—平成 3 年度—』国分寺町教育委員会
- ・上野川勝 / 稲垣圭子 1997『北台 2 号遺跡（推定東山道道路跡）』『国分寺町埋蔵文化財調査報告—平成 6 年度—』国分寺町教育委員会
- ・田名網 宏 1995『古代の交通』吉川弘文館
- ・大川清 / 青木健二他 1997『栃木県石橋町折本遺跡』石橋町教育委員会
- ・大橋泰夫 / 板橋正幸 1998『那須官街関連遺跡Ⅴ』栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第 205 集 栃木県教育委員会
- ・大橋泰夫 1998『那須官街関連遺跡Ⅵ』栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第 205 集 栃木県教育委員会
- ・板橋正幸 1998『下野国那須郡衙発見の道路遺構』『古代交通研究 第 8 号』古代交通研究会
- ・大橋泰夫 2001『那須官街関連遺跡Ⅶ』栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第 249 集 栃木県教育委員会
- ・板橋正幸 2007『長者ヶ平遺跡 - 重要遺跡範囲確認調査 -』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 300 集 栃木県教育委員会
- ・古代交通研究会編 2004『日本古代道路事典』八木書店
- ・武部健一 2004『完全踏査 古代の道 築内・東海道・東山道・北陸道』吉川弘文館
- ・武部健一 2005『完全踏査 続古代の道 山陰道・山陽道・南海道・西海道』吉川弘文館
- ・近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店
- ・木下 良 2009『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館



宇都宮市東谷・中島地区遺跡群出土の東山道路
(財)ちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター写真提供)

I 東山道と律令国家

1 五畿七道と東山道

古代のわが国は律令国家と呼ばれ、中国唐の律令制度を導入した中央集権国家体制が採用されていた。律は現在の刑法、令は行政法などに相当する法律で、こうした法律に基づいて統治されていた。この律令国家体制は、大化元(645)年の大化革新から平安時代前期まで行われていた。

律令国家は大宝元(701)年の大宝律令で完成したとみられている。中央には藤原京・平城京などの都城が造営され、太政官を頂点とした二官八省の官僚機構が整備された。地方は国郡里(郷)などの行政組織に編成され、地方行政区画である五畿七道が設定された。五畿は山城・大和・攝津・河内・和泉の畿内五カ国の総称で、七道は東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の各道の総称をいう。都からは各道が放射状にのび、各國の国府を結ぶ官道が設置された。

東山道は行政区画として「道」の意味と、地方に設置された官道として「道」の意味があった。行政区画としての東山道には、近江・美濃・飛騨・信濃・武藏(宝亀2(771)年に東海道へ編入)・上野・下野・陸奥・出羽の国々が所属していた。その官道の道筋は、現在の近畿地方から中部・関東地方の山地沿いを通り、東北地方へのび、「山の道」とも呼ばれていた。

近年、関東地方において、発掘調査により東山道の実態が明らかにされている。平成7年、東京都国分寺市の武藏国分寺跡北西地区遺跡で、東山道武藏路と推定される道路遺構が確認され、全長340mに渡って、側溝を伴った幅12mの古代官道跡が検出された。この道路遺構は4時期の変遷が確認された。1時期目は構築時の遺構で、側溝の心々距離が12m幅の道路跡である。2時期目は両側溝の上層の硬化面で、溝が埋没した跡に用いられた道路跡である。3時期目は幅



東山道武藏路調査状況（国分寺市教育委員会写真提供）



東山道武藏路航空写真（国分寺市教育委員会写真提供）

墨書き器「駅長」
(川越市教育委員会写真提供)

12mの道路上に重複して塗かれた幅9mの側溝を有した道路跡である。4時期目は道路最北部で、1時期目の道路から東側にカーブを描いて下がっていく道路である。こうした4時期の変遷時期は不明であるが、7世紀第3四半期に築造され、10世紀中頃まで道路として機能していたとみられている。現在遺構は埋設保存され、遊歩道として整備されており、幅12mの官道のスケールの大きさが実感できる。

埼玉県川越市の八幡前・若宮遺跡では、平成5年に8世紀から9世紀の土坑（掘りくぼめた穴）から「駅長」と底に墨で書かれた土師器の皿が出土した。この付近からは本簡・円面鏡・檜扇片などが出土し、近くに東山道武藏路が通り、その駅家が置かれていたと考えられている。また群馬県佐波郡玉村町の砂町遺跡からは、浅間山を目指して直線的にのびる、側溝を有した最大幅が約12mの東山道跡が検出され注目された。この東山道跡は牛堀一矢ノ原ルートにあたり、7世紀末から8世紀初頭の遺構と推定されている。浅間山を目指した東山道は、信濃の平地でも同様の規模があった可能性が推測される。



群馬県佐波郡玉村町の砂町遺跡で発見された両側に側溝をもつ最大幅約12mの東山道跡。浅間山を目指にまっすぐにのびる。（玉村町教育委員会写真提供）

2 駅制・延喜式と東山道

駅制は律令国家により設定された公的な交通制度で、東海道・東山道などの駅路が都から諸国の府を結び、30里(約16 km)ごとに駅家が設置されていた。駅家には駅馬が置かれており、養老令の厩牧令では、大路(山陽道)には10疋、中路(東山道・東海道)には10疋、小路(北陸道・山陰道・南海道・西海道)には5疋の馬を常備すること、郡ごとに伝馬を5疋置くこと、海・大河などの駅には船を4隻以下備えることが規定されていた。なお、郡ごとに置かれた天馬のルートは郡と郡を結び、駅路とは別の系統であり、この伝馬制と駅制をあわせて駅伝制と呼んでいる。

駅制は兵部省の所管であったが、実際の運営の責任者はその国の国司であり、この国司の補助要員として駅務を行うのが駅長とされた。駅長は駅戸（駅の労役に従事する戸）の中から家が富み、実務能力がある者を終身任用し、身分は駅長に相当した。駅長の仕事は駅家の管理、駅財政の収支、

第1図 東山道・駅配置概念図
 (黒坂周平『東山道の実証的研究』
 吉川弘文館 1992年より作成)



通行する官吏・公使の駅馬・駅子(駅の労役を負担する者)の雜ぎ立てや宿・食事の提供などであった。こうした駅務の代わりに駅長は調(税として納める特産品)・庸(労役の代わりに布などを納める)・雜徭(成年男子が一年に60日以内負担する労役)などの課役は免除された。

各駅には駅務にたずさわることを義務づけられた一定の戸があり、駅戸と呼ばれていた。この駅戸では駅馬を飼養し、駅田を耕作する義務をもち、駅子を出した。駅田は駅運営のための財源で、東山道では3町と規定されていた。各駅には100名から150名程度の駅子がいたと推定され、駅馬に乗せた官人達やその荷物を次の駅まで引いて送る任務、駅馬の飼養、駅田の耕作などに従事した。こうした駅務の代わりに、駅子は庸・雜徭などの徭役(税としての労役)は免除された。

駅の施設としては駅長の事務室、通行する官人達の休憩・宿泊所、駅子の宿り場、炊事場などがあったとみられている。屋外には馬をつなぎ飼養した厩舎、飲み水や生活用水を汲んだ井戸、米・酒・塩などを納めた倉庫、門などがあったと推測されている。特に大路であった山陽道の駅の建物は、一辺約80mの築地で囲まれ、その内部に礎石を用いた瓦葺で、白壁赤漆りの壮麗な建物があったことが、兵庫県龍野市の小犬丸遺跡(布施駅家と推定)の調査などから解明されている。

東山道は七道の中で最も距離が長く、「延喜式」(律令法の施行細則を集成した法典で、927年に撰道)によると駅家86ヶ所、駅馬841疋、船10隻、伝馬221疋を数えた。多くのルートが山道で離所が多数あったが、承和2(835)年以降に東海道に橋や渡船が整備されるまでは、奥羽地方に通じる最も重要な交通路が東山道であった。



栃木県那須烏山市の既久保遺跡調査区航空写真

宇都宮市東谷・中島地区遺跡群出土の東山道跡

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター写真提供)

II 信濃の東山道

1 県内の東山道推定ルート

長野県内の東山道推定ルートについては、「延喜式」兵部省諸国駅伝馬の条の「信濃國」の項に、駅馬、「阿知井十疋」。育良、賢錐、宮田、深沢、覺志各十疋。錦織、浦野各十五疋。曰理、清水各十疋、長倉十五疋。麻績、曰理、多古、沼辺、各五疋」伝馬「伊那郡十疋。諏訪、筑摩、小佐、佐久郡各五疋」と記されている。こうした文献に記された駅名や地名、古代遺跡などから信濃國の東山道推定ルートをみてみたい。

美濃國坂本駅から信濃國の入口の阿智村神坂峠(標高1576m)を経て、尾根道を下ると園原の神坂神社に下りる。当時「信濃坂」と呼ばれた神坂峠では千数百点にのぼる鏡・剣・玉などをかたどった石製模造品・土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土し、道筋の各所からも石製模造品・須恵器片などが出土している。神坂神社の前の傾斜地は杉ノ木平遺跡で、発掘調査で多数の石製模造品・灰釉陶器や道路状遺構などが出土した。道路状遺構は傾斜地をU字状に窪め、道幅は最大幅で路底幅が4.6m、路縁幅が5.2m、最小幅で路底幅が1.2m、路縁幅が2.2m(文献10)あり、路底は踏み固められていた。次の阿知駅は、阿智村役場の北方に広がる駒場の地に推定されている。この阿知駅には、難所の神坂峠を越えるために30疋の駅馬が備えられていた。

阿知駅から育良駅に向かうルートは、上手線・中通り線・下手線の3ルートが市村成氏により推定(文献11)されている。上手線は阿智村七里久集落の西端を直線的に通り、伊賀良北方に向かう。この伊賀良北方地区の育良神社付近に、育良駅が推測されている。次の賢錐駅については松川町の上片桐、中川村の片桐周辺などに推定され、宮田駅については宮田村に推定され、深沢駅に向かう。箕輪町中箕輪の大道上遺跡では春日街道に沿って溝状遺構が検出され、東山道の側溝の可能性が指摘(文献20)されている。深沢駅は箕輪町大出の中道遺跡から銅製帶金具・奈良三彩小壺・鏡などの遺物や遺構が多数出土し、付近に深沢駅の存在が推定されている。

深沢駅から覺志駅に向かう東山道は、辰野町の小野神社周辺を通り、善知鳥峠を越えて塩尻地方



令制東山道概念図
〔長野県史通史編 第1巻〕より)

に入ったとみられ、その後瓦塔片が出土した大門周辺を通り、^{がとう}^{はいりやくとうき}、^{はいりやくとうき}綠釉陶器・八稜鏡や大規模な集落跡が発見された吉田川西遺跡近くを通っていたと推定されている。覺志駅については、一志茂樹氏は松本市村井付近に推定し、また塙尻市^{さとうぎ}の吉田や大門付近との推定もなされている。松本地方には平安時代に信濃国府が置かれ、その所在地については惣社説・大村説・筑摩説・深志説が提起されている。次の錦織駅は、旧四賀村七嵐の関宿付近や岡田町周辺に推定されている。

この錦織駅には保福寺^{ほふくじ}（1345m）を越えるために15疋の駅馬が備えられ、峠を越えた浦野駅にも同数の駅馬が配置されていた。浦野駅の位置は、青木村当郷の奈良・平安時代の集落跡が出土した岡石遺跡付近に推定されている。その後東山道は東方に直進し、上田市小泉字長谷田では幅約12mの両側に側溝を有した道路状造構の一部が検出された。さらに東山道は千曲川を渡り、塔心礎や瓦塔片が発見されている上田市常磐城の唐臼遺跡周辺に日理駅が推定されている。その後信濃国分寺跡の南側を通過して、東御市に入り、小諸市諸に推定されている清水駅に向かう。

清水駅から長倉駅に向かう推定ルートには3本あり、長倉駅の位置については長倉神社の所住する軽井沢町中軽井沢と御代田町小田井付近に推定されている。小田井付近には奈良・平安時代の大規模な遺跡である鎌師屋遺跡群があり、唐三彩陶枕片・円面鏡や埋葬馬などが出土しており、周辺に長倉駅が推定されている。その後旧碓氷峠、あるいは入山峠を越えて、上野国へ向かうルートが推定されている。錦織駅から北方にのびる東山道は、越後国府へ向かう支道とされている。麻績駅は麻績村に推定され、次の日理駅は犀川の渡河地点に位置していたと推定されている。次の多古駅は長野市三才の田子遺跡付近に、さらに沼辺駅は信濃町の野尻湖畔に推定されている。



東山道と推定される春日街道西側の溝状遺構（箕輪町大道上遺跡）
(箕輪町郷土博物館写真提供)

2 古東山道の推定ルートと石製模造品

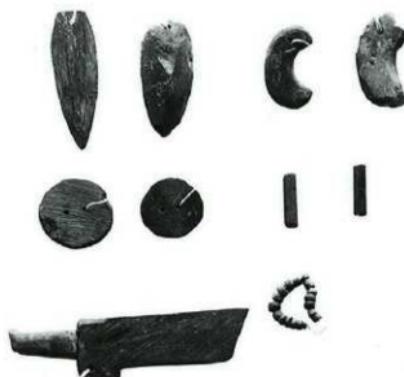
律令制度が整備される以前の原初的な東山道は「古東山道」、「東の山の道」などと呼ばれ、令制東山道とは区別されている。この自然発生的な交通路は、一志茂樹氏が古墳時代の滑石製の石製模造品出土地をたどり、推定（文献7）されている。現在、阿智村の神坂峠、立科町の雨境峠、佐久市望月の瓜生坂峠、軽井沢町の入山峠を結ぶルートが推定されている。信濃国の入口の神坂峠では、千数百点の鏡・剣・刀子・馬・玉などをかたどった石製模造品や須恵器・灰釉陶器などが出土している。こうした石製模造品には小孔があり、木の枝などにかけて、峠の神に旅の安全を祈願して手向けられたものとみられている。

また立科町の雨境峠の勾玉原遺跡・鳴石遺跡などからも多数の石製模造品が出土している。平成5年・6年には発掘調査が町教育委員会により実施（文献15）され、両側に側溝をもつ道路跡が検出された。この道の両側溝間の心々距離は4~4.3m、路面の幅は3.5~3.7mあり、人工的な造り道であった。この道については木下良氏が「令集解」考課令にみられる須芳郡主帳が造った「須芳山嶺道」にあたり、諫訪郡衙と佐久郡衙を結ぶ伝路であろうと指摘（文献3）されている。この伝路沿いには御牧である望月牧も所在しており、貢馬もこの道を通行したとみられている。佐久市の瓜生坂峠では白玉70個、手捏土器5点が出土している。

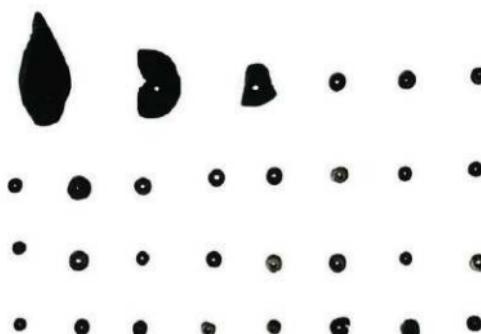
また軽井沢町の入山峠でも昭和43・44年の調査で、鏡・剣・刀子・玉などをかたどった多数の石製模造品が出土している。このため古東山道は、入山峠を越えて上野国に向かうルートが考えられている。これに対して令制東山道ではそのまま入山峠を使用したとする説、石製模造品は5・6世紀の古墳時代を中心とする資料であり旧碓氷峠とする説があり、いまだ決着していない。



多数の石製模造品が出土した阿智村の神坂峠遺跡



阿智村神坂峠遺跡出土石製模造品（長野県宝）



立科町雨境峠遺跡群出土石製模造品（劍形・有孔円板・臼玉）



軽井沢町入山峠遺跡出土石製模造品

3 令制東山道と信濃国府

信濃国府跡推定地については、701年の大宝律令制定後、小県郡に国府が設置され、平安時代の初期頃に筑摩郡へ移転したとする説が定説とされてきた。小県郡には信濃国分寺が置かれ、東山道や千曲川があり、交通の要衝に位置していることなどがその理由とされた。また平安時代の10世紀に編纂された『和名類聚抄』には「国府在二 筑摩郡一」と記されており、この頃には松本地方に国府が所在していたことが知られる。

平成6年には、上信越自動車道建設に伴う千曲市屋代遺跡群の調査が県埋蔵文化財センターによって行われ、126点にのぼる多量の木簡や木製祭祀具、7世紀後半から8世紀前半の官衙の配置をもつ建物群が検出され、この周辺に埴科郡衙跡や初期の信濃国府跡が推定された。8世紀前葉に信濃国府が屋代遺跡群周辺に存在した場合、支道とされる越後国へのびる東山道が初期国府の時期には本道の駅路であった可能性も推測される。次に東山道と信濃国府についてみてみたい。

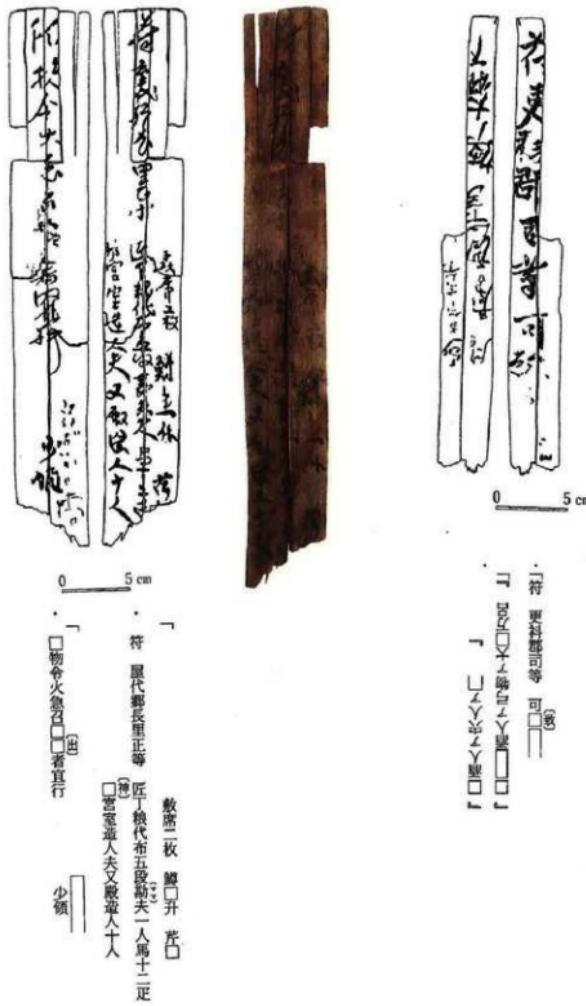
(1) 千曲市屋代遺跡群

千曲市屋代遺跡群は、千曲川右岸の自然堤防上に位置している。平成6年の調査で、信濃国司が更科郡司等にあてて発した命令書である国符木簡が出土した。この国符木簡は出土した地層の位置から8世紀前葉の資料とみられ、信濃国司の命令が更科郡に出され、そこから水内郡—高井郡—埴科郡へと順次送られ、最終的に埴科郡の屋代遺跡群で木簡が廃棄されたと考えられている。この最終の廃棄地は埴科郡衙か、発給元の信濃国府と推測されている。また埴科郡の郡司が、屋代郷長らに神事のために物資や人夫を出すよう命令した郡符木簡が出土した。(文献12・18)

木簡には「東間郡(筑摩郡)と記されたものもみられ、郡衙間の交流や郡の上位にある国府の機能の存在が考えられている。さらに「小綱」と記された木簡が出土しており、これは軍團の次官の職名であることから軍團がこの地に存在した可能性も推測されている。軍團は律令制下に地方



千曲市屋代遺跡群の調査状況（長野県立歴史館写真提供）



ぐんぶ もっかん

はにしへん ぐじゅ こうじ りせき ぐんが
埴科郡の都司が屋代郷長・里正等に対して、郡衙
の神事のための敷席・鋪・斧・人夫などの調達を命じた命令書。「郷長里正」の文字から郷里制が行われた西暦715年から740年の木簡と推定されている。
(長野県立歴史館写真提供)

(長野県立歴史館写真提供)

屋代木簡 15号（国符木簡）

信濃国司が更科郡司等に於て發給した命令書。欠損のため命令内容は不明であるが、国司の命令である国符が木簡でも発給された例としては全国初の出土。出土した層位から8世紀前葉の資料とされている。

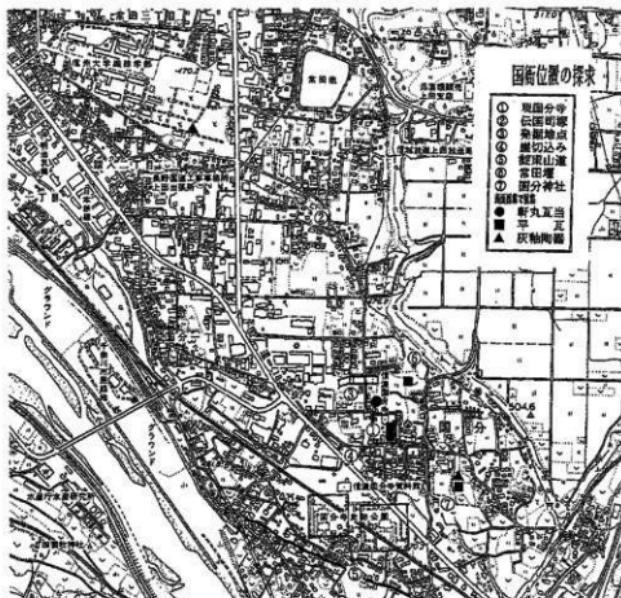
(長野県立歴史館写真提供)

に置かれた兵团で、国ごとに一団ないし数団あり、最大1000人の兵士が所属していた。軍団の長は大毅^{だいき}、次官は小毅と称され、国司の支配下に置かれていた。8世紀前葉に初期国府が屋代遺跡群周辺に置かれていた場合は、東山道が歴代地域を通り、次の駅の日理駅も比較的近くに置かれ、犀川あるいは千曲川の渡河地点に設置されていた可能性が考えられる。出土した木筒は現状では8世紀前葉までのもので、その後上田地方に移転した可能性が推測される。

(2) 上田地方の信濃国府跡推定地

上田地方に信濃国府が置かれていたとする一番の理由は、信濃国分寺が上田市国分に所在していることによる。当時国司は国分寺の建立や管理に責任をもち、国分寺の近くに国府が設置されている事例が多い。また官道の東山道が通り、河川交通が活発な千曲川が流れ、奈良時代の上田地方は国府が置かれる最適の地であったと考えられている。上田地方の国府所在地については諸説があり、常田の信州大学織維学部の敷地一帯、現在の信濃国分寺境内付近、条里的遺構のある古里^{こり}地域、下之郷の生島足島神社付近が想定されている。このうち現在まで奈良・平安時代の遺物が確認された信州大学織維学部、現在の国分寺が所在する国分遺跡群についてみてみたい。

信州大学織維学部の敷地一帯は、六所明神を祀り信濃社とされる科野大宮社が付近にあること、里人がかつてこの地域を「コオノダイ」と呼び、「国府の台」を意味していたとみられるこ



国衙位置の探求（「東山道と僧謹国分寺」上田市誌歴史編(3)より）

による。平成 6 年には上田市誌編纂に伴う遺物の表面採取調査が行われ、敷地東側の地点から奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器片が採取されている。また平成 9・11 年に行われた国分遺跡群の調査では、多数の瓦類や幅約 9m の南北に通じる道路状造構、掘立柱建物群、人工的な溝跡などが出土して、国府などの官衙に関係した遺跡の可能性が推測されている。道路状造構は、信濃國分寺跡の南側に推定される東山道から分岐して北方にのびていたとみられている。

(3) 松本地方の信濃国府跡推定地

平安時代の承平年間(931～938 年)に成立した『和名類聚抄』の「国府は筑摩郡に在り」との記載から、平安時代には国府が筑摩郡にあったとみられている。松本市惣社地区には總社とされる伊和神社があり、この惣社地区が有力な信濃國府跡推定地になっている。この他に大村説・筑摩説・深志説が提起されている。昭和 56 年から 5 年間、松本市教育委員会によって行われた信濃國府跡確認調査は惣社地域を中心に実施された。その結果、国府遺構の確認はできなかったものの、平安時代の堅穴住居跡や須恵器・灰釉陶器などが発見された。この地域には宮北遺跡、下原遺跡など、平安時代の遺物を伴う大規模な遺跡群が存在する。

また本郷の大村遺跡からは瓦葺建物の存在を示す大量の瓦類や、円面硯・帶金具などが出土している。特に役人が腰に着用した帶金具は、国府などに勤務する人々の存在を推測させる資料である。近隣の大輔原遺跡からは円面硯、柳田遺跡からは大型掘立柱建物跡なども出土している。さらに県の県町遺跡からは奈良・平安時代の住居跡や海老籠、風字硯などが出土している。松本地方に国府が移転した理由としては、対蝦夷との関係で、越後・出羽・陸奥へ最短距離で通じる交通の要衝の地であったために国府が置かれた(文献 23)と推測されている。国府は東山道の覚志駅と錦織駅の中間に位置され、平安時代初期頃には小県郡から移転したとみられている。



松本市惣社の總社とみられる伊和神社

4 東山道を通行した人々

当時東山道を通行した人々は、駅銘を交付されて駅馬・駅舎・駅子などを利用して旅行した官人達、都へ自らの税の調・庸を肩に背負って運搬した運脚と呼ばれた農民達、諸国から徵發されて都で官庁・貴族・寺社などの雜役に従事した仕丁、諸国軍團から毎年交代で上京し、宮城諸門・八省院・大極殿などを守った兵士の衛士、諸国軍團兵士の中から北九州の防衛に3年交代で配置された防人などであった。また東北地方の般夷を征討するための軍団も通行した。

通行した官人は駅使と呼ばれた太政官の使者や赴任する国司などで、政府から支給された鈴である駅銘を振り鳴らして駅子・駅馬を徵發した。駅馬の使用数は濫用を防ぐため駅銘の枚数(きざみの数)だけと規定されていた。都への調・庸の運搬は農民達の重い負担になっていた。調は綿・麻布などの織維製品を中心とした手工業製品や各地の特産物であった。また庸は毎年10日間の労働の代わりに麻布や米を納めるものであった。また租税のうち臼でついて精白した米の春米は都へ送られ、この運搬も運脚である農民の負担であった。こうした貢納物は国府や都衙で国司・郡司が立会って品質・数量を点検し、帳簿と照合した。麻布には貢納地・貢納者・品名・数量・検査をした国司名・郡司名・検査日などが墨書きされ、国印が押された。

運搬する運脚の中には途中で倒れる者もあった。『続日本紀』の天平宝字元(757)年十月条には「庸調を運ぶ脚夫(運脚)が郷里に還る時、糧食が絶え、行旅病人が生じて途中で横死する」と記されており、官道を通行できても駅馬・駅舎などは利用できない農民にとっては過酷な旅であった様子がうかがわれる。

信濃国から東山道を経て、藤原京・平城京・長岡京へ運ばれた調の特産品としては、出土した木簡から麻布の他に鹿の干肉(伊奈評)・芥子(小県郡・水内郡)・タデ科の多年草で薬草・染料の大黄(高井郡)・鮭(埴科郡)・年魚(安曇郡)・雄(更級郡)などがあった。また『延喜式』に信濃国の特産品として、鮭の加工品である楚割鮭・背腸・筋子・氷頭や、梓の木で作った丸木弓の梓弓、物を研ぎ磨くのに用いた木戉・干肉・梨が記されており、こうした物品を人々は籠・袋などに入れて、肩に背負って東山道を運んだとみられている。



栃木県宇都宮市東谷・中島地区遺跡群で発見された東山道跡（平成9年 現地説明会）

III 県内の東山道関係遺跡

1 阿智村神坂峠遺跡

美濃国(現岐阜県南部)と信濃国の国境をなす標高 1576m の神坂峠は、東山道のうちでも最も難所の峠であった。神坂峠遺跡はこの峠頂上にあり、古代人が峠の神に手向けの祭祀を行ったところで、ここに供えた滑石製模造品を主体とした多くの祭祀遺物や構造が発見されている。(文献14) なお、この峠は律令制以前の「古東山道」と、その後のいわゆる「令制東山道」の二つの推定ルートが想定されており、滑石製模造品類は主として前者にかかる遺物とみられる。

本遺跡の発掘調査は、昭和 26 年から数次にわたって行われ、多くの滑石製模造品・土師器片・須恵器片・鉄塊等が出土した。また、昭和 42・43 年には阿智村教育委員会によって本格的な発掘調査が実施され、峠東側の小平坦地に石畳や石組・柱穴・小窓穴・石積などの構造や大量の剣形・有孔円板・刀子形・馬形・鏡形・勾玉・白玉などの石製模造品等が検出された。これら石製模造品には小孔があけられていて、木の枝などにかけて峠の神に手向け、旅の安全や無病息災などを祈願したものと考えられる。

このほか土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・中世陶磁器・中国製磁器・陶馬・土製馬・黒道具・砾石・銅鏡片・鉄器などの、とくに古墳時代から中世にかけての各種遺物も確認されている。遺跡は、昭和 54 年 10 月に国指定史跡となり、出土した滑石製模造品や玉類 1,289 点が「神坂峠祭祀遺跡出土品」として、平成 17 年 9 月長野県宝に指定された。



神坂峠遠望（阿智村写真提供）



神坂峠の現状



長野県宝 神坂峠遺跡出土石製模造品（古墳時代）



神坂峠遺跡出土灰釉陶器（平安時代）

2 飯田市恒川遺跡群

飯田市座光寺に所在する恒川遺跡群は、田中倉垣外・恒川 A・恒川 B・阿弥陀垣外・新屋敷・やくしきいと 薬師垣外の各遺跡で構成されている。国道 153 号座光寺バイパス建設工事に伴って、昭和 52 年に発掘調査が実施され、田中倉垣外地籍から大型の掘立柱建物跡 3 棟がほぼ南北方向に主軸をそろえて発見された。また昭和 57 年度から平成 13 年度まで実施された伊那郡衙跡の実態解明のための範囲確認調査によって、平成 6 年には正倉(穀としての稻を納めた倉)が発見され、伊那郡衙跡であることが確認された。この恒川遺跡群の周辺には、諸説があるが東山道の通過や、郡衙を結ぶ伝路の存在が推定されている。

恒川遺跡群からは 40 点以上の須恵器の内面鏡が発見され、墨で文字を書く郡役所で使用された可能性が考えられる。また皇朝十二銭の一つである和同開珎銀錢が出土して注目された。この和同開珎銀錢は発行の翌年の 709 年には銀錢禁止令が出された貴重な資料であり、平城京から郡司などの役人が持ち帰ったものと推測される。また薬師垣外地籍からは正倉と判断された掘立柱建物跡 9 棟、礎石建物跡 3 棟、区画溝などが発見され、炭化米や瓦が出土して注目されている。炭化米は正倉に納められていた米が炭化したものとみられている。瓦は正倉を開む溝跡から少量出土しており、法倉と呼ばれる大型の倉の屋根に用いられた可能性が推測される。

墨書き土器では 9 世紀後葉の灰釉陶器坏の高台部に、墨書の「厨」が記された資料が薬師垣外遺跡の溝跡から出土しており、郡衙の食物を調理する厨房を示す墨書きと推測されている。また 8 世纪前半に美濃国で焼かれた刻印須恵器の「美濃」が出土している。これは美濃国の官窯である岐阜市の老洞古窯跡群で焼成された須恵器を示す刻印の「美濃」が押されており、東山道を通って役人が持ち込んだものとみられる。さらに役人が朱書きに使用した朱墨を溶いたパレットとみら



刻印須恵器「美濃」

美濃国の官窯の岐阜市老洞古窯跡で
焼かれた須恵器が、東山道を運搬さ
れてもたらされたと推測される。

丸めんけん

伊那郡衙で用いられた 瓦

れる、朱墨の付着した灰釉陶器の底部が出土した。この朱書きは税金を納める際に帳簿と数量を照合するために使用されたとみられている。

このように伊那郡衙跡である恒川遺跡群では、東山道を利用して都や隣国などから銭や灰釉陶器、須恵器などがもたらされ、8世紀から9世紀にかけて伊那地方の政治・経済の中心地であったことが推測されている。(文献19)



緑釉陶器花文碗



朱墨バレット

朱墨は税金を納める際に数量と帳簿を照合するため使用したとみられる。



炭化米

正倉の掘り方や周辺からは多数の炭化米が出土し、税として納められたと推定される。



軒丸瓦

二重圓文（左上）と三重圓文（右下）の二種の軒丸瓦が出土し、8世紀後半に正倉に使用されたものとみられる。

恒川遺跡群出土遺物

3 箕輪町大道上遺跡・中道遺跡

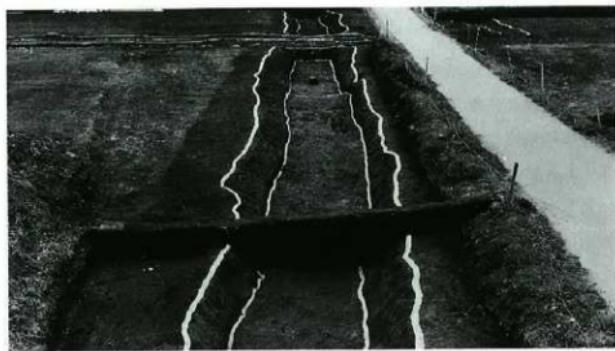
大道上遺跡は箕輪町大字中箕輪に所在し、箕輪町教育委員会によって平成7年に発掘調査が実施された。その結果、溝状遺構8条、土坑18基、方形周溝状遺構1基などが出土している。このうち4号溝状遺構は、春日街道と呼ばれる舗装道路の西側にはほぼ平行する形で発見された。この溝状遺構は全長が51.9m、上面幅は約3m、底面幅は1.6mから2mで、深さは約1mの逆台形の断面形であった。こうした溝跡は、北方に離れた第2調査区でもこれに統くと推定される溝状遺構が検出されている。(文献20・21)

春日街道については以前から、奈良・平安時代の東山道ルートとの推定が行われており、この4号溝状遺構を東山道の側溝とし、舗装道路直下とその東側土手下部より検出された平坦な硬化面を道路面と推定する説が提起されている。この4号溝跡から出土した遺物は、9世紀後半と推測される灰釉陶器の長頸壺・皿と、須恵器や土師器であった。この大道上遺跡では、道路遺構全体の確認が必要であるが、今後の調査が期待されている。

中道遺跡は、中箕輪大出の天竜川西方の扇状地に所在し、南側には深沢川が東流している。中央自動車道建設工事に伴う昭和48年の発掘調査により、奈良・平安時代の堅穴住居跡69棟、掘立柱建物跡31棟、土坑18基などが発見された。出土遺物は多量の土師器・須恵器や奈良三彩小壺、灰釉陶器、刀子、鎌、馬具などが出土した。また箕輪町教育委員会の調査によって帶金具、須恵器、紡錘車などが出土している。こうした多数の遺構・遺物から、「和名類聚抄」に記された東山道の深沢駅や古代の牧などとの関係が推測されている。なお、箕輪の天竜川右岸の低湿地に所在する箕輪遺跡からは、平安時代の畜糞・馬形・人形などの木製祭祀具が出土して注目されている。



大道上遺跡 4号溝状遺構 (箕輪町郷土博物館写真提供)



大道上遺跡 4号溝状遺構（部分）



中道遺跡出土帯金具
役人が身に付けた腰帶の付属
金具で、バックルにあたる
鉸具とよばれる部分。

大道上遺跡出土灰釉陶器（9世紀後半）



箕輪遺跡出土人形・馬形（右端 1点）

4 塩尻市吉田川西遺跡

吉田川西遺跡は塩尻市広丘吉田に所在し、田川の中流域に位置している。昭和59年、60年にかけて長野自動車道建設に先立って発掘調査が行われ、奈良・平安時代の堅穴住居跡が266棟、掘立柱建物跡が8棟発見された。この大規模な集落遺跡の近くには、官道である東山道が設置されていたと推定されている。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・八稜鏡や、中国産の青磁・白磁など重要な資料が多数出土した。

この遺跡からは墨書き器が253点出土している。これらは8世紀末に現れ9世紀後半に最も量が増え、10世紀以降急速に減少している。8世紀末から9世紀初頭の「西寺」、9世紀後半の「榛原」などが出土している。このうち「西寺」は集落内の寺の存在を推測させる墨書き器である。また「榛原」は「はいばら」と読むことが可能で、隣接する松本市中山付近に置かれていた埴原牧との関連性が注目されている。

特に平安時代中期の有力者の墓所から出土した綠釉陶器は近江国（滋賀県）産で、八稜鏡、漆製品、灰釉陶器とともに出土し、国の重要文化財に指定されている。こうした綠釉陶器は東山道を利用してもたらされたとみられ、「富豪の輩」と称された財力を持った有力者が9世紀後葉から10世紀にかけて所有していたと推測されている。この有力者は埴原牧の官営牧場の役人となって馬を生産したり、東山道を利用して運輸業を行って財産を蓄えていった可能性が推測されている。（文献22）



吉田川西遺跡発掘調査状況



「西寺」



「財富加」



「榛原」

吉田川西遺跡出土墨書き器（長野県立歴史館写真提供）

5 松本市下神遺跡

下神遺跡は松本市神林の奈良井川と鎮川が合流する南側に位置し、8世紀初めから9世紀後半まで繁栄した集落跡が確認され、200棟以上の建物跡が出土している。昭和58年から松本市教育委員会が、昭和60年から長野県埋蔵文化財センターが、高速道路建設に伴って発掘調査を実施した。この遺跡では9世紀初めに最盛期を迎える、二重の堀に囲まれた一辺10mを超す大型の竪穴住居跡が建てられていた。出土遺物は、奈良三彩・墨書き土器・漆紙文書・鏡・鉄製農具などであった。特に墨書き土器は9世紀代がほとんどで、490点出土した。このうち墨書き土器「草茂」は元大納言の藤原冬緒が仁和3(887)年に、多武峰妙楽寺に寄進した記録のある荘園「草茂庄」とみられている。「多武峰略記」には「信濃國筑摩郡蘇我郷草茂庄一処」と記されている。また墨書き土器「南殿」は中心的な建物をさし、墨書き土器「西戸舎」は西戸の家の意味か、人名とみられている。この付近には東山道ルートが推定されており、この遺跡は東山道沿いの大規模な有力集落跡と推測されている。(文獻24)



「草茂」



「南殿」



「小長」



「西戸舎」



円面硯

下神遺跡出土墨書き土器・円面硯（長野県立歴史館写真提供）

6 松本市県町遺跡・大村遺跡・大輔原遺跡

松本市内には令制東山道の駅家として、覺志駅、錦織駅が推定されている。一志茂樹氏は覺志駅を村井付近、錦織駅を旧四賀村七嵐の関宿付近に推定している。また堀内千万蔵氏は錦織駅を刈谷原峠や稻倉峠南方の岡田町から原付近に推定している。さらに近年、覺志駅の位置については吉田川西遺跡のある吉田説なども考えられている。

平安時代には『和名類聚抄』の「國府在筑摩郡」などの記載から筑摩郡に信濃國府が所在したとみられており、惣社説・大村説・筑摩説・深志説が考えられている。(文献 23) このうち有力な説は惣社説で、総社とみられる伊和神社があり、惣社の東方から里山辺にかけて条里的遺構があることなどが理由とされている。昭和 56 年から 61 年にかけてこの地域を中心に信濃國府跡の



筑摩郡の信濃國府の推定位置（1・2）
(松本市編「松本市史 第2巻 歴史編」1996年より)



松本地方の國府推定地関係遺跡
(松本市教委「惣社遺跡 I」2002年地図を一部改変)

確認調査が松本市教育委員会により行われ、平安時代の竪穴住居跡や須恵器・灰釉陶器などが出土した。また伊和神社の所在する宮北遺跡や隣接する下原遺跡には平安時代の遺物が濃密に分布している。

この伊和遺跡の南西方向に約800mの地点には、9世紀代を最盛期とする郡町遺跡が所在している。この遺跡では、奈良・平安時代の多数の住居跡や古瓦・風字瓦・海老鏡・綠釉陶器などが出土し、注目されている。

また松本市本郷の大村遺跡では、これまでに奈良・平安時代の竪穴住居跡が約120棟、掘立柱建物跡が3棟や、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鶴尾・円面鏡・帶金具・綠釉陶器などが出土している。また大村遺跡の西側に隣接する大輔原遺跡では平安時代の竪穴住居跡や円面鏡・把手付中空円面鏡などが出土している。さらに近隣の柳田遺跡からは、柱穴が1.2m四方を超える3間×4間の大型掘立柱建物跡が出土しており、古代の寺院跡や国府・郡衙などの官衙遺跡が周辺に所在していた可能性が推測されている。



大村遺跡出土遺物



県町遺跡出土丸瓦



県町遺跡出土風字瓦



大村遺跡出土緑釉陶器



大輔原遺跡出土円面硯



大輔原遺跡出土
把手付中空円面硯

7 青木村浦野駅推定地

松本地方から標高1345mの保福寺峠を越える東山道は急峻な山道である。峠を挟んだ錦織駅と浦野駅には15疋ずつ駅馬が配置されていた。保福寺峠から少しづつ「せばっと」と呼ばれた地点からは、昭和63年の調査で東山道の道筋とみられる両側に側溝を有した道路状遺構が出土した。両側溝の心々距離は約2mで、石列や敷石遺構が一部確認されたが、時期を決定する遺物は確認できなかった。その後道は北進して一遍水・市之沢・牧寄・立石などを経て、浦野駅に推定される当郷の岡石遺跡に至る。途中の牧寄遺跡では掘立柱建物跡が出土し、土師器・須恵器・灰釉陶器や柱根が出土し、平安時代から中世にかけての遺跡とみられている。当郷の岡石遺跡は昭和50年に発掘調査が行われ、堅穴住居跡17棟や掘立柱建物跡などの遺構、土師器・須恵器などの遺物が多数出土し、8世紀中葉の奈良時代から11世紀の平安時代にかけての遺跡と推定されている。ただしこの遺跡からは浦野駅を示す直接的な遺構・遺物は出土しておらず、浦野駅の所在場所の確定は今後の重要な課題とされている。



青木村浦野駅推定地周辺の景観



浦野駅推定地に想定復元されたミニ東山道

8 上田市西部の東山道推定路と高田遺跡・道路状遺構

浦野駅を通過した東山道は、浦野の藤之木遺跡、下室賀の岳の鼻遺跡、小泉の高田遺跡、吉田の東村遺跡など奈良・平安時代の遺跡群の近くを直線的に東進すると推定されている。このうち藤之木遺跡は平成7年の調査で8世紀中葉から9世紀中葉に推定される堅穴住居跡が20棟、掘立柱建物跡が8棟確認された。特に8～9世紀代とみられる馬の歯が2ヶ所まとまって出土し、この2頭分の埋葬された馬については、近くに推定される浦野駅の駅馬の可能性が考えられている。(文献26)

高田遺跡は平成2年・5年・10年の上田市教育委員会による調査で、堅穴住居跡が53棟、掘立柱建物跡が16棟、溝跡が11ヶ所、板塀跡、井戸跡などが発見された。(文献27) また106点にのぼる平瓦・丸瓦や大量の須恵器・土師器が出土し、8世紀後半から11世紀にかけての大規模な遺跡であることが確認された。このうち掘立柱建物群には廻付建物が含まれ、全体に「コ」の字形に建物が配置され、小県郡衙の出先機関や福田郷の郷衙などの可能性が推測されている。

平成17年には、高田遺跡の北西約200mの地点から両側の側溝の心々距離が約12mの道路状遺構が約6mの長さに渡って検出された。側溝は幅が1.7mから2.0mあり、路面は全体に強く叩き締められていた。(文献28) 調査は開発事業に伴う限定されたトレンチ調査であったが、今後この東山道推定ラインでの調査成果が期待されている。なお、岳の鼻遺跡からは9世紀の瓦塔片が5点出土した。また東村遺跡からは7世紀後葉から8世紀初頭とみられる四重弧文軒平瓦1点や平瓦・丸瓦が19点出土し、古代の寺院跡の存在も推定される。(文献26) どちらの遺跡も東山道推定路に近く、東山道を経てもたらされた仏教文化を示す資料と考えられる。

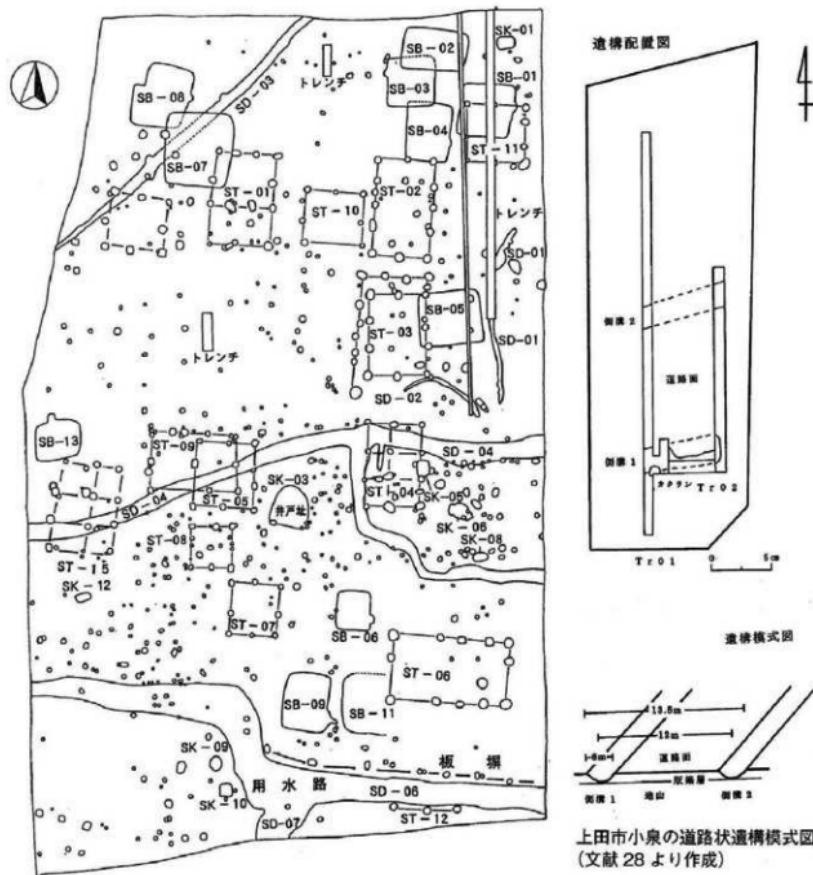


1. 東村遺跡 2. 築籠田遺跡 3. 宮脇遺跡 4. 高田遺跡
5. 岳の鼻遺跡 6. 藤之木遺跡 7. 唐臼遺跡 8. 道路状遺構出土地点

上田市西部の東山道推定路と周辺の古代遺跡
(文献26より作成)



出土した高田遺跡の据立柱建物跡



上田市小泉の道路状遺構模式図
(文献 28 より作成)

上田市高田遺跡南側地区の遺構配置図



小泉地区で検出された道路状遺構



藤之木遺跡で発見された馬齒（第 55 号竪穴住居跡出土）



上田市東村遺跡出土四重弧文軒平瓦



上田市岳の鼻遺跡出土瓦塔片

9 上田市駕籠田遺跡と道路状遺構

上田市築地の駕籠田遺跡（文献29）は、^{かみののりえき}浦野駅から日理駅に向かう東山道の推定路にほぼ重要な地点に位置している。平成9年に発掘調査が行われ、^{かたてのうとう}掘立柱建物跡が43棟、^{たてあわせ}堅穴住居跡が5棟、^{おひじき}道路状遺構、井戸跡、溝跡などが出土した。掘立柱建物跡は計画的な配置や廂付建物跡、倉庫と推定される縦柱建物跡がみられ、出土遺物より8世紀後半から9世紀初頭までの建物群と推定されている。こうした建物群は小県郡衙の出先機関、福田郷の役所である郷衙跡との推測がなされている。この駕籠田遺跡の掘立柱建物群は9世紀初頭で消滅しており、この役所の機能を高田遺跡の9世紀前葉以後に出現する掘立柱建物群

が引き継いだ可能性も考えられている。

この駕籠田遺跡からは両側に側溝をもつ道路状遺構が、長さ40mに渡って東西方向に検出された。両側の溝の心々距離は約4.5mで、溝の幅は約0.8m、溝の深さは約0.1m、溝を含めた道幅は約6mであった。全体に水田造成のために削平されていたが、この溝跡からは8世紀後半の長脣甕片や須恵器坏片が出土した。この道路状遺構は、東山道から分岐した道路の一部であるとの推測がなされている。この道路状遺構の延長線上、東方へ約600mの地点には、奈良時代後期から平安時代初頭の掘立柱建物群が11棟発見された官舗遺跡があり、この建物群と東山道を結ぶ道路跡と推測されている。



駕籠田遺跡の遺構配置図



駕籠田遺跡で出土した道路状遺構

10 上田市唐臼遺跡と日理駅推定地

上田市常磐城の唐臼遺跡には、塔心礎とみられる巨石がある。この石は長さが1.77m、幅が131m、高さが0.45mあり、上面中央に直径38cm、深さ20cmの円筒形の柱穴があいており。この穴のそばには石の祠が置かれ、柱穴に溜まった水をつけるとイボがとれるとされる「イボ神様」が祀られている。この巨石は塔の中心に立てる心柱の基礎となる石で、この付近に塔が建てられていたと推定されている。(文献8)

また焼物のミニチュア塔の屋根部分にあたる瓦片が、付近から出土している。瓦塔を製作した目的については、木造塔の替わりとした、信仰の対象として堂内に安置して礼拝した、寺院建設の淨財を募るため予定地に見本として製作した、墳墓の目印として設置されたなどの説がある。こうした遺物から千曲川の渡河地点にあたるこの場所には古代寺院があったと推定され、日理駅がこの付近に推定されている。この寺院については、調・庸を運搬する農民や旅行者のために設置された宿泊所である布施屋的な性格をもった寺院との推測もなされている。

日理駅は「渡り」を意味し、千曲川の渡河地点にあった駅と考えられ、『延喜式』によると駅馬は10匹を配置していたことが知られる。この唐臼遺跡からは古舟橋下流約100mの古舟渡と呼ぶ地点を東山道は通り、古屋敷地籍を経て、条里造構が残る中之条と下之条の字境を南北方向に直線的に走り、浦野駅に向かうルートが推定されている。古代の駅路には字境を直線的に通る事例が多く、この上田市の場合も典型的な事例の一つと考えられている。



唐臼遺跡出土瓦塔片



塔心礎と推定される巨石が残る唐臼遺跡



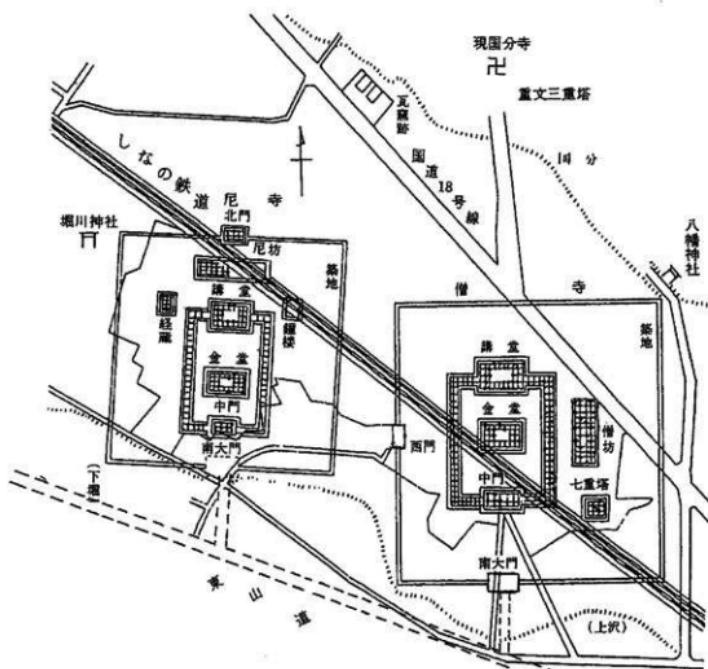
日理駅推定地（高白遺跡）と上田市・青木村の東山道推定ルート（黒坂闘平「東山道の実証的研究」吉川弘文館より）

11 上田市信濃国分寺跡と国分遺跡群出土道路状遺構

東山道は日理駅から約 90 度進路を変え、南東方向に千曲川右岸に沿って直進すると推定されている。その後總社とされる科野大宮社付近、信濃国分寺跡の南方を通過し、千曲川沿いに東御市の海野宿、白鳥神社、片羽の八幡神社周辺を直進し、小諸市諸に想定される清水駅に向かうルートが推定されている。

信濃国分寺跡は上田市国分字仁王堂・字明神前に広がり、千曲川を南方に望む第三段丘上に位置している。北側の一段上の第二段丘上には、古代の国分寺の伝統を受け継いだ天台宗の信濃国分寺が所在している。昭和 38 年から 46 年まで 8 次に渡る発掘調査が実施され、僧寺跡・尼寺跡のほぼ全容が解明された。

僧寺跡では講堂跡・金堂跡・中門跡・回廊跡・僧坊跡・塔跡が確認され、これらの建物を囲む築地は 100 間(約 177m)四方であることが解明された。また尼寺跡は僧寺の築地からの距離が 40m と西側に近接して確認され、中門跡・回廊跡・金堂跡・講堂跡・尼坊跡・北門跡・經蔵跡が検出され、



信濃国分寺僧寺・尼寺伽藍配置図（奈良時代）



和同開珎 (尼寺跡出土)
和同元年(708年)に発行された貨幣



縁釉陶器 (香炉のふた)



九九算「七九六十三」が刻まれた文字瓦
(僧寺西門跡付近出土)



信濃国分寺跡と国分跡群の道路状遺構位置図



九葉素弁蓮華文軒丸瓦



十葉(九葉)単弁蓮華文軒丸瓦



十葉(九葉)単弁蓮華文軒丸瓦



国分遺跡群で発見された南北に通じる幅約9mの道路状遺構

80間(約148m)四方の伽藍地であることが確認された。出土遺物は大量の瓦類や土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁碗・和同開珎・円面鏡・鉄釘などが出土した。

平成12年から18年にかけては、史跡保存整備事業に伴う発掘調査が僧寺跡を中心に継続的に実施された。平成12年から15年の僧寺跡北東域調査では、川原石を敷き詰めた石敷遺構や掘立柱建物跡が5棟確認された。また平成16年には僧寺南大門跡が確認され、間口3間(10.5m)、奥行き2間(6.6mもしくは6.9m)の瓦葺の大規模な八脚門であることが解明された。さらに平成18年には四脚門の僧寺西門跡が確認され、その付近から「七九六十三」と九九算が刻書された8世紀後半の平瓦が出土して注目された。この刻書は平瓦が生乾きの段階で、瓦工人が習書したものとみられている。

平成11年に調査された国分遺跡群からは、両側に側溝をもつ幅約9mの南北に通じる道路状遺構が、長さ15mに渡って検出された。この場所は現在の信濃国分寺本堂の北西側約100mの地点であり、南側に延長すると僧寺跡と尼寺跡の中間に通り、南方の東山道に合流する可能性が推測されている。この道路状遺構は信濃国分寺と国府などの役所を結ぶ道路であった可能性も考えられている。(文献30)

12 小諸市清水駅推定地

東山道清水駅は、小諸市諸字大門の地籍に推定されている。昭和24年に行われた北佐久郡誌編纂の調査によって、この付近に駅が推定された。駅推定地の後方には廃寺跡があり、周辺からは豊富な清水が湧き出ている。この大門地籍の近くには寺内・清水田・古屋敷・道添・大道添などの地名が残る。この清水駅から長倉駅へ向かうルートについては3説あり、第1説が小諸市の石峠・藤塚から御代田町塙野を通る、第2説が小諸市の柏木・八満から御代田町馬瀬口を通る、第3説が小諸市の乙女・御影新田から御代田町小田井を通るルートが推定されている。



小諸市諸の東山道清水駅推定地

13 佐久地方の東山道推定路

清水駅から長倉駅に向かう東山道推定ルートは、第1説の御代田町塩野から清万、軽井沢町追分を経て中軽井沢の長倉神社付近に想定される長倉駅を通り、峠の熊野皇大神社のある旧碓氷峠を越えて上野国へ向かうルートが推定されている。また古宿・鳥井原を経て古東山道が通過したいりやま入山峠から上野国へ向かうルートも推定されている。なお、第2説の御代田町馬瀬口を通るルート、第3説の御代田町小田井を通るルートも軽井沢町追分で合流するとみられている。

御代田町小田井には長倉・諏訪神社があり、この周辺にも長倉駅が推定されている。この小田井集落の西方には奈良・平安時代の大規模な遺跡である鍛師屋遺跡群が広がり、この遺跡群には前田遺跡・野火付遺跡・宮ノ反遺跡などが含まれている。前田遺跡からは墨書き土器「長倉寺」、宮ノ反遺跡からは官衙と推定される7世紀末から8世紀前半の掘立柱建物群が出土した。また野火付遺跡からは埋葬馬が発見され、長倉駅との関連が推測されている。

長倉神社

軽井沢町中軽井沢の沓掛にあり、この周辺に長倉駅が推定されている。神社は以前長倉山のふもとにあったといわれている。



長倉・諏訪神社

御代田町小田井上宿にあり、もとは豊昇の宮平にあったといわれる。また社名は享保2(1802)年に初めて称したとされている。この小田井の西側には鍛師屋遺跡群が広がっており、長倉駅が周辺に推定されている。

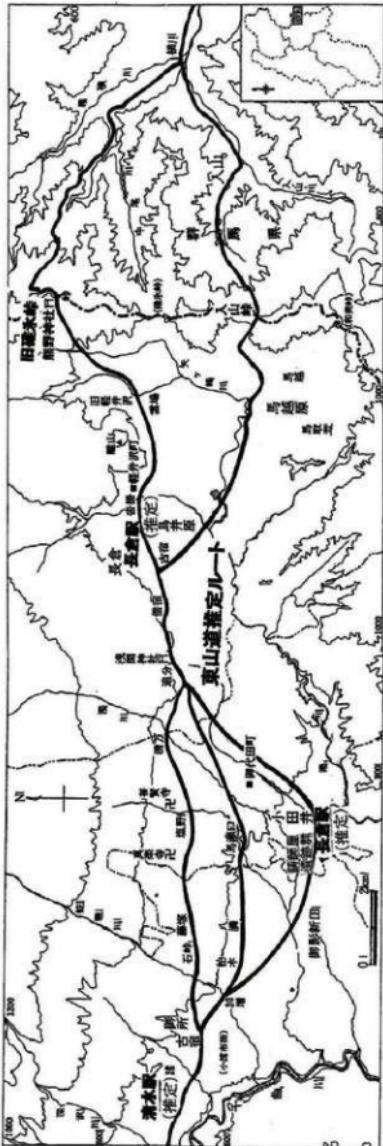




熊野皇大神社（軽井沢町峠・旧碓氷峠頂上）



入山峠（軽井沢町）



佐久地方の東山道指定ルート（文献8・13より作成）

14 佐久市聖原遺跡・前田遺跡

聖原遺跡は長土呂の浅間山南麓の台地上にあり、長土呂遺跡群を構成している。開発事業に伴い、佐久市教育委員会による発掘調査が平成元年から7年にかけて行われた。(文献31) その結果、古墳時代後期から奈良・平安時代の掘立柱建物跡が869棟、竪穴住居跡が818棟検出された。発見された遺物は、土師器・須恵器・縄文陶器・灰陶器・白磁・円面鏡・瓦塔片・銅碗・帶金具・和同開珎・八稜鏡・石製印「伯万私印」・刻書須恵器「佐」・墨書き土器「小郡」「於寺」などの貴重な資料である。こうした遺物は官衙や寺院に関係した資料であり、この遺跡の北側にある芝宮遺跡群とともに付近には佐久郡衙跡が推定されている。この聖原遺跡は長倉駅推定地の一つである小田井地区から南西に約2km程離れているが、東山道が小田井周辺を通るとすると、東山道に近い場所に佐久郡衙が置かれていたと考えられる。

前田遺跡は小田井地区から西方へ約1km程にある鉢師屋遺跡群の中の遺跡で、佐久市と御代田町にまたがって所在している。佐久市前田遺跡からは唐三彩陶枕片や墨書き土器「長倉寺」「長倉」などが出土している。また御代田町では、円面鏡・墨書き土器「倉」など貴重な遺物が出土している。鉢師屋遺跡群は佐久市・小諸市・御代田町にまたがり、昭和59年から62年まで約10haの発掘調査が行われた。その結果、8世紀の奈良時代の竪穴住居跡が251棟、9世紀の竪穴住居跡が71棟発見された。出土遺物は役人が腰に付けた帶金具や円面鏡・和同開珎などの鐵貨が発見され、8世紀の役所の整備に関連して配置された計画村落と推定されている。また多数の掘立柱建物群は、計画的に配置された倉庫群とみられている。またこの遺跡群では奈良・平安時代の馬骨が35体分発見されており、東山道の駅馬との関連が推測されている。



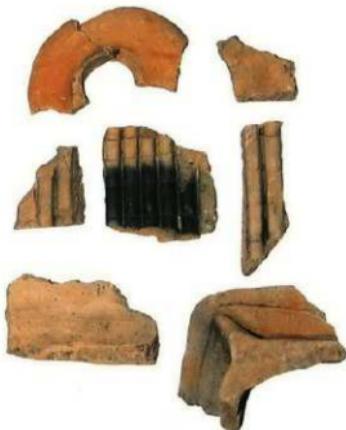
佐久市聖原遺跡調査状況（佐久市教育委員会写真提供）



帶金具（聖原遺跡）



和同開珎（表・裏）
(聖原遺跡)



瓦塔片（聖原遺跡）



唐三彩陶枕片（前田遺跡）

（佐久市教育委員会写真提供）



御代田町前田遺跡調査状況（浅間縄文ミュージアム写真提供）

15 御代田町野火付遺跡の埋葬馬

御代田町の野火付遺跡は昭和 59 年に調査され、平安時代の集落跡や 5 頭の馬が埋葬された跡が発見された。この馬は鑑定の結果、2 頭が 4、5 歳、2 頭が 10 ~ 12 歳、残りの 1 頭は 20 ~ 30 歳ほどで、130.5 cm 程度の体高をもつ木曾馬程の中型の馬であることが解明されている。これらの埋葬馬は、野火付遺跡の北東約 1 km の小田井付近に推定される長倉駅の駅馬とみる説、野火付遺跡の北方約 3 km の塩野牧の御牧馬とみる説がある。野火付遺跡に隣接する前田遺跡からは「長倉寺」の墨書土器が出土し、長倉駅との関連が推測され、また 20 ~ 30 歳の老齢馬の埋葬は朝廷に獻上される御牧馬よりは駅馬の可能性が高いと考えられている。



野火付遺跡出土の平安時代の埋葬馬（浅間縄文ミュージアム写真提供）

IV 信濃ゆかりの万葉歌と万葉歌碑

1 信濃ゆかりの万葉歌・歌碑

万葉集は現存する最古の歌集であり 20 卷で構成され、そこには長歌 264 首、施頭歌 63 首、仏足石歌 1 首、短歌 4,208 首の合計 4,536 首の歌と、漢詩 4 首、文章 1 編などが収録されている。万葉集の歴史は舒明天皇の時代に始まり、天平宝字 3(759) 年正月の大伴家持の作歌が最も新いため、最終的な成立は宝亀年間(770 ~ 781 年)か、延暦元(782)年から 2 年頃とみられている。

万葉集はその歌風から、第 1 期の舒明朝から壬申の乱(672 年)まで、第 2 期の柿本人麻呂により文字による作歌が行われ、形式・叙情とともに大きく発達した平城京遷都(710 年)まで、第 3 期の山上憶良・大伴旅人・山部赤人達によって継承・発展され憶良が没した天平 5(733) 年まで、第 4 期の織細・技巧的な歌が多い天平宝字 3 年まで

の 4 期に区分されている。(文献 33・34)

この万葉集には、東山道が交通路として重要な役割を果たしていた奈良時代の信濃国の峰・山・川などを歌った歌や、信濃ゆかりの防人などの人々がその心情を歌った歌がみられ、当時の歴史や人々の生活を偲ぶことができる。このため信濃ゆかりの万葉歌や現在 50 余基が知られる県内の万葉歌碑のうち主なものを紹介してみたい。



松本市保福寺跡の万葉歌碑

信濃の万葉歌碑一覧

No	万葉歌	巻数-歌番号	作者他	所在場所
1	浅野野に立ち神さぶる昔の根のねもころ誰ゆあわが恋ひなくに	12-2863	柿本人麻呂歌集	飯山市瑞穂 小菅神社里宮
2	紅の浅野の野らに刈る草の束の間も吾を忘らすな	11-2763		長野市豊野町浅野 浅野神社
3	浅野野に立ち神さぶる昔の根のねもころ誰ゆあわが恋ひなくに	12-2863	柿本人麻呂歌集	*
4	中麻奈に浮き居る船の清さてなば逢ふこと難し今日にしあらずは	14-3401	信濃国歌	長野市柳原 中俣南公民館
5	中麻奈に浮き居る船の清さてなば逢ふこと難し今日にしあらずは	14-3401	*	長野市大町 長沼神社
6	庭に立つ麻手刈り干し布団す東女を忘れたまふな	4-521	*	長野市鬼無里ふるさと資料館
7	人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手兒が言な絶えそね	14-3398	*	千曲市倉科 大日堂
8	人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手兒が言な絶えそね	14-3398	*	千曲市倉科石井 倩科公民館
9	緋衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして	20-4401	施田舎人大島	千曲市上田山 千曲川萬葉公園
10	瓜食めば子ども思はゆ栗食めばまして思ばゆ~	5-802	山上憶良	*
11	しきがねも金も玉も何せむにまさる宝子にしかめやも	5-803	山上憶良	*
12	信濃路は今の篠道刈株に足踏ましむな者はけ我が青	14-3399	信濃国歌	*
13	石走る重見の上の早蕨の葉え出づる春になりけるかも	8-1418	志貴皇子	*

14 中庭奈に浮き居る船の櫂さてなば逢ふこと難し今日にしあらずは	14-3401	信濃国歌	千曲市上山田 千曲川萬葉公園
15 み薫焼る信濃の真弓わが引かは貴人さびていなと言はむかも	2-96	久米押鶴	* *
16 み薫焼る信濃の真弓引かずして波はくるわざを知ると言はなくに	2-97	石川部女	* *
17 信濃なる千曲の川の纏石も君し踏みては玉と拾はむ	14-3400	信濃国歌	* *
18 信濃なる千曲の川の纏石も君し踏みては玉と拾はむ	14-3400	*	千曲市上山田温泉 佐久届旅館
19 春の園紅にはふ桃の花下濕る道にて立つ娘子	19-4139		千曲市上山田温泉 佐吉公園
20 住吉の岸を田に振り躊躇し船さて帰るまでに達はぬ君かも	10-2244		* *
21 わが宿の萩咲きにけり秋風の吹かむを得たばいと詠みかも	19-4219	大伴家持	千曲市上山田 上山田支所南方
22 石幕呂に我物申す夏瘦せに良しといふものそ絶縁りめせ	16-3853	*	千曲市上山田三木本 合津氏宅
23 一つ松幾代か腎ぬる吹く風の声の清きは年深みかも	6-1042		千曲市新山温泉 山崎氏宅
24 八千種に植木を領未て時ごとに咲かむ花を見つづはな	20-4314		千曲市戸倉 戸倉支所近く
25 春雪見るるなへに青柳の枝くひ持ちてうぐひす鷺も	10-1821		* *
26 春は朝え夏は緑に紅のまだらに見ゆる秋の山かも	10-2177		* *
27 萩の花咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに秋の風吹く	10-2231		* *
28 ちはやふる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため	20-4402	神人部子忍男	坂城町風会地早雄神社
29 信濃道は今のは墨道刈株に足踏ましむな履着けわが夫	14-3399	信濃国歌	松本市保福寺町 保福寺峰
30 かの児ろと寝すやなりむはだ薄油野の山に月片寄るも	14-3565	東歌相聞	上田市諏野
31 薩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また薩摩朝観の花	8-1538	山上櫻奥	上田市上室賀 室賀峰万葉公園
32 千早振る神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため	20-4402	神人部子忍男	*
33 春は朝え夏は緑に紅のまだらに見ゆる秋の山かも	10-2177		*
34 石走る垂見の上の早蕨の崩え出づる春になりにけるかも	8-1418	志貴童子	上田市上室賀 室賀峰万葉公園
35 鶴衣襷に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして	20-4401	他田舎人大島	上田市上塙屋 上塙尻神社
36 たらちねの母がその葉る桑すらに顛え衣に着すとふものを	7-1357		上田市中央北 斎雲寺神社
37 信濃なる須賀の荒野にはととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり	14-3352	信濃国歌	上田市皆平高原 自然館
38 信濃なる須賀の荒野にはととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり	14-3352	*	上田市塩川坂井
39 信濃なる千曲の川の纏石も君し踏みては玉と拾はむ	14-3400	*	佐久市中込 中込公園
40 大和には群山あれど取りよりよろふ天の香具山登り立ち国見を～	1-2	舒明天皇	佐久市取出 カトリック幼稚園
41 大和には群山あれど取りよりよろふ天の香具山登り立ち国見を～	1-2	*	小諸市乙 暁の星幼稚園
42 日の暮れにうすひの山を越ゆる日はせなのが袖もさやにふらしつ	14-3402	上野国歌	軽井沢町駒ヶ岳 旧碓水鉱見晴台
43 ひなぐりうすひの板をこえだいにが恋しくわすらぬかも	20-4407	他田舎人皆曾	* *
44 紅の浅葉の野らに瀧る草の東の間も舌を忘らすな	11-2763		松本市美須々 長野県綾葉神社
45 信濃なる千曲の川の纏石も君し踏みては玉と拾はむ	14-3400	信濃国歌	松本市里山辺 深川畔
46 信濃なる須賀の荒野にはととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり	14-3352	*	松本市篠賀 貝野中学校
47 信濃道は新の墨道刈株に足踏ましむな履着けわ夫	14-3399	*	北安曇郡池田町池田
48 信濃なる須賀の荒野にはととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり	14-3352	*	塩尻市宗賀 宗賀小学校
49 桜花咲きかも散ると見るまでに誰れかもここに見えて散り行く	12-3129		伊那市高遠町 文化センター前
50 信濃なる須賀の荒野にはととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり	14-3352	信濃国歌	下伊那郡下條村吉岡曾野
51 もののあの八十をとめらが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花	19-4143	大伴家持	下伊那郡阿南町 阿南町民会館
52 信濃道は今のは墨道刈株に足踏ましむな者はけわが背	14-3399	神人部子忍男	下伊那郡阿智村棚原 神坂神社
53 ちはやふる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため	20-4402		* *

(田村彦秀氏編「万葉二千詩」、田中久光氏ホームページ「万葉集を携えて 万葉歌碑 長野県」、藤森芳潤氏資料などから作成)

2 阿智村神坂神社万葉歌碑

信濃国と美濃国との国境にある神坂峠は標高1,576mであり、東山道最大の難所とされ、当時は「信濃坂」と呼ばれていた。この峠から5km程下った阿智村園原の神坂神社境内には2基の万葉歌碑が建てられている。園原の地は、県歌である「信濃國」に「尋ねまほしき園原や」と歌われており、万葉集の古歌や伝説の里として広く知られている。

神坂神社は住吉明神を祀る古社で、境内には樹齢千年と伝えられる「日本杉」の巨木があり、境内に隣接して東山道推定路がみられる。万葉歌碑は神社入口に「信濃道者 伊麻能波里美知 可里婆祢尔 安思布麻之牛奈 久都波計和我世」と万葉仮名で刻まれた犬養孝氏書で、平成6年に阿智村が建立した万葉歌碑が建つ。この歌は「信濃道は今^はの塁道刈株に足踏ましむな沓はけわが背」(万葉集14卷3399)である。歌の意味は、信濃の道は新しく開かれた道であるため切り株が多いので、足を傷つけないように沓をはきなさい、わが夫よと、防人の妻が夫を心配して詠んだ歌とされている。松本市と青木村の境界の保福寺峠にも同様の歌碑が建てられている。

もう1基の歌碑は、「知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 愚佐麻都里 伊波負伊能知波 意毛知知我多米 右一首 主帳埴科郡神人部子忍男」と万葉仮名で刻まれている。この歌は「ちはやふる神の御坂に幣奉り肅ふ命は母父がため」(万葉集20卷4402)である。歌の意味は、荒ぶる神の領域である神坂峠に幣を手向けて、わが身の安全と無事に帰還することを祈るのは、故郷に待っている父母のためである、というものである。幣は近年多数発見された石製模造品をさすとみられている。



神坂神社の南側を通る東山道（推定）



阿智村の園原にある神坂神社